
だから彼女はついてくる！

今宮いたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だから彼女はついてくる！

【Nコード】

N0603X

【作者名】

今宮いたる

【あらすじ】

記憶喪失の少女「雪城鈴」と、彼女と同居することになった高校2年生の神村イツキ。現代の常識が殆ど吹っ飛んでしまっている彼女と、それに振り回される彼の日常を描く。たぶんこれはハーレムの方針になるでしょうね。

これが二人の日常

「あっ」

夕方、コンビニの店内に不吉な音が響く。

開封された、いや開封されてしまった袋からは枯葉のようなものが何枚も舞い落ちている。

ポテトチップスだ。

「うわああ！ 何やってんだよお！」

ほんの一瞬、神村イツキが彼女から目を離れた瞬間の惨事。

彼は狼狽してしまう。当然だ。

「開いちやった……」

自分でも良くないことをしたという自覚があるのだろうか、雪城鈴は自らの手で開封してしまったソレを両手に持ち、申し訳なさそうにイツキに視線を送る。

「ああ、もう！ 貸して！」

急いで走り寄り、少し乱暴気味に彼女の両手からポテトチップスの袋を引っぺがす。

「何にも触れずに待ってて」と言うと、彼はレジの方へ駆けてゆく。レジにいるアルバイトであろう店員に頭を下げて平謝りをする彼の姿を見ながら、彼女は頭を掻く。いけないことをしたという自覚はあるのだ。ただ、その判断基準は彼女にとってはとても曖昧なもの。

どれが正しくてどれが正しくないのか。

何が普通であって何が普通ではないのか。

彼女にとって全ては未知の世界。

「ごめんね？ イツキ」

帰り道、イツキの顔を覗き込む鈴。真珠のように黒く長い髪の毛と大きな目が特徴的だ。

「……ああ、いいよ」

少し疲れた様子で応える。

「ああいう所では開けちゃダメなんだね。次からは気をつける」
自分の胸のあたりで両手を結びながら、心に刻むように唱える。

「……そもそも、なんでポテチの袋なんか持ってたんだ？」

「何かなって思ってた」

「それで、確かめてたら開いた、と」

「そう」

「好奇心旺盛か、お前は」

「だ、だからあ！ もうしないよ！ 触らないもん！」

反省（弁解？）する彼女の姿はもう何度見ただろうか。

「いや、注意するの忘れてたし、俺も悪かった」

「はあ。この前行ったお店では、開けるどころか食べることであったのに、不思議だね……。判断が難しくって参っちゃったよ」

「あれは試食っていつて、食べ物宣伝だ」

「ふーん……。じゃあもつといっぱい食べとけば良かった」

「やめろよなあ、みつともない」

イツキは年頃の女の子がスーパーの試食コーナーにがつついている姿を想像しながら述べる。

「でも、良かった！」

「？ 何が？」

鈴の顔が少しだけほころぶ。

「だって、欲しかったんでしょ？ ソレ。なら丁度良かったじゃん！」

イツキの持つコンビニの手提げビニール袋を指して話す。中には先ほど開封済みのポテトチップスが入っている。

「欲しかったんじゃないよ！ 買い取らされたの！ 商品にならないから！」

「ええ！ そうなの！？」

「そうなんですよ、鈴さん」

本当に驚いた表情をしている鈴に彼も怒る気が無くなってしまう。その代わりに深い嘆息が漏れる。

家に着く頃には、彼はすっかり疲れきってしまっていた。近くのコンビニ行っただけだというのに、この疲れ様は何なののだと言いたくなる。それに対して鈴はまだまだ元気だ。いつものようにテレビの前にちょこんと座って、チャンネルをいじくり回している。

「明日だよな？」

天気予報が明日は晴れたの曇だのと言っている。その前に座っている鈴はテレビから視線を外してイツキに移行しつつ話しかける。

「学校か？ そうだな」

「イツキと同じ学校で、しかも同じクラス！ 改めて、宜しくね！」
満面の笑みだ。

彼女、雪城鈴は明日から『おそらく』高校2年生になる転校生。彼女が転校して在籍する予定のクラスは神村イツキと同じ。そして学校は明日の4月1日から始まる。

「ああ」

（宜しくって言われてもなあ……）

晩ご飯の支度をしながら彼女が話に耳を傾ける。

明日が4月1日ということは、今日は3月31日。彼と彼女が接点を持つのは明日からのはずである。

神村イツキが在校生で、雪城鈴が転校生。

そういう関係になるはずだ。

だが、彼女は2週間も前から神村イツキを見つけて付きまとっている。そう表現してしまうと鈴には不意かもしれないが、現にそれ以外にこの状態を表す言葉が見当たらないので仕方がない。

「……鈴。本当に鈴は転校生で、明日俺と同じクラスになるんだな

？」

「そうだよ？」

「じゃあ、丁度いい。鈴、俺から離れるんじゃないぞ」

「そーんなこと言われなくてもわかってるよお」

鈴が嬉しそうにイツキに飛びついてくる。だがイツキは「しまった！」という表情をしてそれを回避して跳ね除ける。

「そういう意味じゃなくて！」

「じゃあ、どういう意味で？」

「お前、記憶ないんだろ？」

「ない。ほとんど覚えてない」

「だから。また変なこと為出かすかもしれないだろ？」

エプロン姿で人參を切りながら、居間に追い返した鈴に話す。彼は県外の出身者なので、一人暮らしだ。主に両親からの仕送りで生活している彼は、自分の生活を送ることで精一杯の毎日を送っていた。

そこにヒョコツと現れたのがこの雪城鈴。

「しないよお」

まさかあ、と言うような表情で彼の方を見る鈴。

「いや、する。初めて会った日、ずーっと俺を尾行して家までついてきたお前なら、十分にありえる。現に今日もひとつやかしたしな」

「欲しくもない商品を買ったこと？」

「違う！ お前がポテチを店内でぶっ放したこと！」

この調子で明日から大丈夫なのだろうかと不安になる。いや不安なんてものでは到底済まない。この不安という表現は、『ヤバい』という言葉に置き換えられる。それも、テスト前に勉強してないからヤバい、とか、今日体育の授業があるのに体操着を忘れたからヤバい、とか、そういう類のものではない。それはもう、電車が到着する瞬間にホームに転落したからヤバい、とか、ハイキングしていたら滑落した上に目の前に5匹もクマがいるからヤバい、とか、そ

んな感じのヤバさだ。彼が伝えたいのは、とにかく安穩としてられる状況ではないということ。

「だからあつ、ソレは反省してるよお……」
肩をすくめる鈴。

鈴にはどこか保護欲を煽る雰囲気がある。小さな背丈に、幼い女の子を思わせる顔立ち。肩幅も狭い。大きな人形を抱えさせたら、ほとんど隠れてしまいそうなくらいだ。その姿を見るたびに彼は「うっ……」口をつぐんでしまう。これ以上彼女を責めることにどこか罪悪感を覚えてしまうのだ。

そして記憶喪失故にこの現代社会における断片的な知識しか持ち合わせていない。ましてや常識なんてあったものでもない。

一般常識がないことも、記憶喪失であることも、この社会で生きて行く上では致命的なことだ。だがイツキにはそれをも上回る最大の関心ごと兼疑問点があつた。

それが――「もう一度聞くけど――」

「――なんでお前は俺から離れないんだ？」

大きく息を吸った後に投げかけるこの質問。もう何度しただろうか。

だが、鈴はその問に決まって

「よくわかんない。でも、イツキから離れちゃいけないの」

と答えるだけ。もちろん今回も例外ではなくお決まりのコレで返される。まるでテニスの壁打ち練習かのようだ。彼には鈴の真意が掴めなかった。当の本人もその言葉の意味を深く察していないようであるから、答えのいとぐちさえ見いだせない。

今日の晩御飯は焼き魚と野菜炒めに白米。それらを盆に乗せて鈴の居る居間に運ぶ。イツキは作りたての料理を居間のちゃぶ台にひとつずつ丁寧に置く。

「わぁ」と目を輝かせる鈴。さっきまで夢中だったテレビはそっこのけだ。

「ねえ、もう食べてもいい？」

「ちよっと待ちなさい。手で食う気かお前は」

「手で食べてるところもあるんだよ？」

「確かにあるケドな、それは外国の話だ。ていうか、なんでそんなこと知ってるんだ？」

「テレビで言ってた」

イツキは会話を続けながら二人分の箸とコップを持ってくる。続けて冷蔵庫からお茶の入ったピッチャーをちゃぶ台まで運び、やっそこ飯の時間になった。

明日はとうとう始業式。

木炭と自己紹介と自動ドア

雀のさえずりが聞こえる。

日差しが嫌というほど彼を照りつける。

「朝だよー!!」

鈴が思い切りカーテンをオープンしたのだ。
相変わらず朝っぱらから元気なヤツだなあ、と彼は眠い目をこすりながら肌蹴た布団を再びかぶる。

「あー」

彼女が近付いてくる足音。

彼の周囲の世界は再び強制的に明るくなった。急いで布団を探すも鈴に後方へ吹っ飛ばされているので、偶然が味方してくれる以外に手探りでは探し当てる術がない。

「あーさー!!」

また元気な声が聞こえる。

「うるさいー……」

イツキは小さな声で反撃に出る。

「朝だよイツキ！ 朝！ あーさー！」

「わかった、起きる。起きるから大きな声を出すなって。近所迷惑だろお？」

眠そうな声だ。

「アーサー、アーサーって。なんかの王かお前は……」と、ふと浮かんだ下らない冗談を鈴にふっかけてみるも、目をこすっていた手をどけると彼女は彼の前にはもういなかった。

「何ー？ 呼んだー？」

台所の方から鈴の声。

「いや、何にも……」

少し気恥ずかしそうに制服へと着替えを始めた。朝から騒ぎ立っていた鈴はもう既に着替え終わっている。彼女に遅れること数分、

制服に着替え終わったイツキは眠たそうなふらふらとした足取りで台所へと向かう。

「はい、ご飯！」

急に彼の目の前に、鈴が『ご飯』と称するものがズイと差し出される。

「……木炭？」

「違うよ、パンだよ」

「パンかよ！ 炭化してる！」

「うーん、どうも上手く焼けなかったみたいでねー」

『いやー、参った』とでも言いたそうな表情。台所のテーブルの上はパン粉だらけ。袋から取り出す作業に手間取ったと見える。

「でもさ、こういうのって『見た目じゃない』ってよく言うんでしょ？」

「誰が言つて——」

「テレビ」

彼女の知識は大体がテレビかイツキ。彼が与えていない知識は全てテレビであるから、イツキが『誰から聞いた』と鈴に質問してもその答えはテレビに決まっているのだ。彼もそのことは知っているのだが、ついつい反射的に聞いてしまう。

「だからさ、見た目じゃないんだって！ 食べもせずによく言うよー」

「いやいや、今回ばかりは見た目が重要だろ！ 見るからに食い物じゃない色してるし！」

「えー、せつかく作つたのにい」

「『作つた』って、焼いただけだろ？」

目の前に差し出した皿をテーブルに置きながら、鈴は少し残念そうな表情をする。

「まさか、お前もその消し炭を食ったのか？」

「私は上手く焼けた方を食べた」

「おい！ 失敗作の自覚あるんじゃないかねえか！ 食わそうとするなよ」

な、そんなモン……」

イツキは文句を垂らしながら新しいパンを袋の中から取り出し、オープントースターに放り込む。

「パンは1分くらいで十分。覚えといて」

と言いながらつまみをひねる。

「うん、私もさつきそれを知った。10分焼いたら真っ黒になったんだ」

「そ、そうか……」

10分も焼かれるなんて、何と不運なパンだろうか。冷凍されているパンでも10分間も焼いたらコレと同じ様な暗黒の姿を披露するだろう。しかもよくよく改めて見てみると木炭と言うより、完全に炭だ。このまま『炭』としてパッケージされて商品棚に陳列されていて気付かないほどに真っ黒。それにチラと視線を送りつつさつさと食事を済ませたイツキは、もう既に玄関で待っていた鈴と一緒に学校へ出かけた。ガラス越しではない朝の日差しがまた一段と眩しい。

——何度車に轢かれそうになっただろうか。

教室に到着して自分の席に座る彼は、始業式もまだ始まっていないのにもうぐったりだ。

（道路で鈴が走りまわるから……）

鈴は車の危険性を把握している。『車には注意しないといけない』ということもイツキから幾度と無く諭されてきたので、少なくともその分別はあるはずだ。だが、圧倒的な経験不足。社会的な経験がまったくもって足りていない。彼女が記憶を無くす前はあっただろう『常識』が、今は欠片ほどしか残っていない。毎日が学習だ。例

えば車が曲がり角や死角から飛び出してくるかもしれないとか、急に止まることができないとか、彼女も頭では分かっているはずだ。見ればわかることばかりだし、理解するには容易いこと。しかしその危険性を、身を持って知っているわけではない。だからこそ彼女の無鉄砲且つ大胆な行動が、イツキには心配で心配で仕方なかった。

（あいつ、今頃一人で大丈夫だろうな……？ 変なことしてないだろうな……？）

イツキの脳裏に職員室前で別れた鈴の顔がよぎる。確か満面の笑みで、別れ際にこっちに向かって手を振っていた。彼女が何か変な行動でも起こすのではないかと、イツキの内心はそれはもうハラハラものであったのだが、そんなことを微塵も察していなかったような無邪気なあの表情がまた彼の不安を倍増させる。

始業式は滞り無く執り行われた。校長先生の長つたらしい話も、よくわからない賞状の授与も、来賓の紹介も、彼らにはどうでもいい話。全く頭になんて入っていない。特に今の神村イツキには、そんな話の一片も入る余地など残されていなかった。なぜならこの始業式が終われば次は教室でのホームルーム。普段なら授業ではない、半分歓談の時間となるこの授業。生徒たちにとっては何のプレッシャーもかからない至福の時となるはずだ。それが今回は彼の最大の試験。おそらくこのホームルームの時間に――

「――じゃあ転校生の紹介の時間といこうか！」

教室が一気に沸き立つ。先生が「転校生は女子」だと告げると、より一層大きな歓声に包まれる。

「イツキ、お前ももつと喜べよ！ 女子だってよ！」

「あ、ああ……」

沸き立つ男子生徒にも、力のない笑顔で返す。これからの苦労を考えると両肩に重荷を乗せられるような思いだ。

「それじゃ、雪城。入ってきて」

先生が扉の向こうに立つ転校生、雪城鈴の入室を促す。

「マジかよ……」

小さな声でイツキがつぶやいた。彼女の言っていたことが本当だったからだ。根拠もなく言い張る鈴に、完全には信じきれない気持ちがあそこにあつた彼の思いは、また確信へと一歩駒を進める。彼がそんな思索を巡らせている間に、教室がざわざわした。教室の扉は引き戸形式の一般的なもの。その扉の磨りガラスの向こう側に影が見える。雪城鈴は確かにその向こうにいる。だが扉は開かない。

「……。……あれ？」

鈴は教室の扉の前でつつ立ったまま。何か不思議なものを見るかのように扉を眺めているだけ。

「？ 雪城？」

訝し気な表情をする先生と生徒達。

（何してんだよ、早く入って来いって！）

念波でも出るのではないかというほどに強いメッセージを『鈴に届け！』と祈るも、そんなことを知る由もない当の本人は脳内ハテナマークで呆然と立っているだけ。しびれを切らした先生が扉をガラッと開けると、鈴は「うわっ！」と小さく声を出して驚いた。

「何をしているんだ？ 早く入りなさい」

「あは、はい。自動ドアじゃないんですね」

鈴はどうやらコンビ二などの自動ドアと勘違いしていたらしい。思えば彼女はイツキとコンビ二くらいしか行動を共にしたことがない。記憶のない彼女が『引き戸形式の扉は全部自動だ』と勘違いしていても不思議ではない……？

これはイツキには強烈な先制パンチであつた。

（ぐっ……！ 初端からこんなインパクトの強いことやりがつてえ……！）

先生はこの鈴の返答に失笑。彼女なりの、何かの冗談だと捉えたのだろうか。

鈴は教卓の前に移動する。そして白のチョークを手に取り、黒板に大きく自分の名前を書いた。

「札幌雪祭りの『雪』にノイシュヴァンシュタイン城の『城』、鈴鹿サーキットフラワーガーデンホテルの『鈴』で『ゆきしろすず』と言います。よろしくお願いします」

ぽかんとする先生。

（自己紹介、斬新過ぎるだろ！　ただでさえ言動が目立つのに、これ以上注目をあびるような真似やめてくれよ……）

イツキの精神は初端から大きく削られる。

だが生徒たちの反応は上々。不思議な女の子だなと思われた程度に済んだようだ。さすが雪城鈴の美少女補正。普通ならば『変人だ』『近寄ったら色々な意味でケガするかも……』と思われるところを逆に自らのアドバンテージに変えてしまう。たとえ本人にその気が無くとも『これもこの子の魅力なんだ！』と思わせてしまう。逆の立場なら世の中の不条理を痛感するところだ。実際は彼らの第一印象のままの人間なのであるが……。だが、まさか彼女が記憶喪失者で、しかも神村イツキと一緒に住んでいるなどということは、一瞬たりとも、微塵も思いもしないだろう。もちろんこれは内緒だ。広がれば騒ぎになる。記憶喪失の人なんてこの世は広しといえどもそうそう居てたまるものではない。バレると騒ぎになるのは容易に想像できる。だからイツキも鈴に事前に口止めをしたのだ。鈴はそれに頷いてくれたものの、それだけではこの不安感は解消するものではない。

「いや、初めて知ったよ」

ホームルームも終わり帰路につくイツキと鈴。

「何が？」

「教室のドアって、勝手に開かないんだね」

彼女はイツキと出会ってからの記憶しかない。それ以前の記憶は断片的にしか残っていない。更にイツキが鈴を連れて出かけた場所といえどコンビニくらい。コンビニのドアは勝手に開く。御存知の通り自動ドアだ。鈴はそれしか見たことがない。やはり鈴の中では『扉は勝手に開く』という図式が出来上がってしまったのだ。

「あのなあ、俺の家のドアは勝手に開くか？」

「開かない」

「それと同じ。ドアってのは普通は人が開けないと開かないんだよ。コンビニとか、そういう店とかではサービスで自動だけで普通は自動ドアじゃないんだ。それに、家のドアが自動ドアだったら防犯上宜しくないだろ？」

「それは大丈夫だよ！」

彼女のつぶらな眼差しがイツキに向けられる。

「？　なんでよ？」

「イツキは強いから！　もし悪い人が入ってきてても、やつつけちゃうんだから！」

鈴は笑顔でそう言い切った。

彼にはまさに青天の霹靂だった。

人生で一度も言われたことのない言葉、『強い』。

彼は全く強くない。ケン力だっですぐに負ける。いや、負ける前に降参する。スポーツは人並み。何か突出してできるというわけでもない。

「はあ、別に強くないぞ？　おれ」

鈴の確証のない適当な妄言だと彼は判断する。

「強いよ！」

だがそれは鈴の強い語調で否定された。

「え？」

「強いんだよ、イツキは！　私、何にも覚えてないけど、イツキが強いことは間違いない！」

いつもより強く主張を続ける鈴。ついつい気圧されてしまう。

「そんな根拠もなく強い強いって言われてもなあ……。どこがどう強いんだ？」

「そうだね、銃を持った強盗に素手で応戦するくらい強い」
場面を想像するまでもなく、敗退濃厚なシチュエーションが容易に想起される。

「強すぎるだろ！ 何かの達人かよ！ ていうかその『強い』の意味、違ুকねえか！？」

信憑性など元々無い鈴がこのようなトンデモ例え話を披露しても説得性は皆無。

なので

「……ああ、もうわかったよ。何がどう強いのかよく分かんねえけど、鈴の期待する程度には強くなるように頑張るよ」

と、イツキは華麗に流すことにした。

このまるつきり信じていないイツキの口ぶりに、鈴は口を尖らせる。

「……信じてないでしょ」

「いやいや、信じてますよー」

明らかな棒読みに、鈴はプイとそっぽを向く。

雪城鈴が突然突拍子もないことを言うのは日常茶飯事。

イツキもそろそろ慣れてくる頃だ。

ドラマ

「イツキ」

「うん？」

昼食を終えた休日の昼過ぎ。

鈴はいつもと同じく食い入るようにテレビに齧り付いており、イツキは台所で食器の後片付けをしている。

「人間ってさ、いつどんなことが起こるか分かったもんじゃないよね」

「……？ あ、ああ。そうだな」

急に畏まって話す鈴に違和感を覚える。しかし、特に何の反応も示さず台所で自分のすべき仕事をする。そもそもあの本人がその『いつどんなこと』に巻き込まれて記憶喪失になってしまっているのだから世話もない。

「……………」

それっきり、またテレビ集中モードに突入する鈴。

突然変なことを言うのは鈴のいつもの日常だ。だがそれも記憶回復と学習に繋がる。それを分かっているイツキはこれ以上介入する考えを意識的に排除する。

居間から「ぷはぁ〜」という気の抜けた声が漏れ聞こえてきた。

「ねえ、イツキ、イツキ」

「んー？」

返事は皿とスポンジを持つ手を動かしながら。

「イツキの遺産はどれくらいあるの？」

「！？」

洗っていた皿を滑って落としそうになってしまふ。

「はぁ！？」

「『はぁ！？（モノマネ）』じゃなくて、あるの？ 遺産」

真似されたことに少しイラッとするも、いきなり出た『遺産』と

という言葉にたじろぐ感情が先行する。

「……」

「どうなの？」

「……………ないけど……………多分……………」

心のなかで「高校生に遺産なんてあつてたまるか！」と叫ぶ。

その返答を聞いた鈴の表情が緩む。

「ないんだ！　ないんだね！　良かったあ！」

イツキは何故いきなり鈴がこんな質問をしたのか訳が分からなかった。遺産がないと分かり喜んでいるのもよく分からない。もしあつたらどうだと言っのだろうか。

「……………一体どうしたんだ？　遺産って何のことだ？」

「さっきのニュースでね、あるお金持ちの一家が遺産相続を巡って殺人事件に巻き込まれたつてのをやってたんだ」

休日の昼過ぎ、13時半なんていう微妙な時間帯にニュースなんてあつただろうかとイツキは自分の記憶に検索をかける。

「そんでね、犯人はベビーシッターの人だったんだけど、それを用務員のおばさんが壁から「いやあねえ」って見てて、結局それが決め手になってその人は逮捕されたんだつて！」

鈴の話すニュースは、どうやらイツキがいつも見ているニュースとは一味も二味も違うようだ。不審に思ったイツキはおもむろにチャンネルを手に取り、『番組表一覧』のボタンを押す。

「ニュースなんてやってないぞ？」

一覧にはニュースなど載っていなかった。一斉に12時に始まり、頃合いのよい時刻に終わっている。

「ええ〜？　そんなことないつて！」

「でも、どこにもないんだけど」

「よく見てよ」と、鈴はイツキからチャンネルを奪い取り、番組の時刻軸を13時半辺りに持ってくる。

「ほら、あつた。これ」

ほらと言われるイツキだが、どこにもニュースという文字は見え

ない。

「どれ？」

「これ」

『偽りの果实く呪われた遺産』（再）』

「昼ドラだよ！！」

「ヒルドラ？ ヒルドラー？」

「そう！」

「一般的な家庭で起こった事件をドキュメンタリー風に描いたニュースじゃないの？」

「違う！　なんで一般的な家庭に『呪われた　』があるんだよ！」
「でもでも！　ちゃんと天気予報もやってたよ？　上の方に小さく出てた」

「それ臨時テロップだよ！！　なんで天気予報がそんな冷遇されてんだよ！　いつももつと大きいだろ！？」

鈴のテレビの知識が変なふうに解釈されて彼に押し寄せている。

最初の頃に比べると段々と会話が成立するようになってきたのは嬉しいのだが、このような一面を見てしまうと、まだまだ鈴が世間では通用しないということは火を見るより明らかだ。

先ほどまで自分がニュースだと思っていたものをバツサリと否定されてしまった鈴もどこか反論したい様子が伺える。

「あ、そうだ！」

鈴は思い出したかのように冷蔵庫の方に駆けてゆく。

「呪われた黒いパン」

「それはお前のせいだろ！！　早く捨てなさい！！」

イツキはふと、始業式のあの一件を思い出す。

「それとな、変にインパクトのあることするなよな」

「何が？」

「始業式ん時の自己紹介だよ。ノイ……なんたら城とか言ってただろ」

「ノイシュヴァンシュタイン城のこと？ 知らないの？ ルートヴィヒ二世が建てたドイツの城で、昔はノイホーエンシュヴァンガウ城って呼ばれてた——」

「それ。それだ」

「それがどうかしたの？」

「どうもこうも、普通はそんな自己紹介はしないんだよ。お前がその何とか城を言った時、先生の顔見たか？ 『何言ってた？』みたいな表情してたぞ！」

イツキは鮮明に覚えている。

あの空気、先生の表情。

自分のことでもないのに緊張で喉がカラカラになってしまった、

あの時の雰囲気。

全てを。

「……そうなんだ……。じゃあ、チェスキー・クルムロフ城の方が良かったかなあ……」

「どっちもアウトだよ！」

城の知識は何故か残っている様子の鈴。実に断片的だ。ただせっかく鈴が覚えていたこの記憶は、日常生活を営む上では本当に何の意味もなさない雑学に過ぎない。こんなことではなく、少しでも常識人に戻れるような知識を覚えておいて欲しかったとイツキは心の底から思った。

「じゃあさ、イツキは初めて皆と会った時、どんな風に自己紹介したの？」

「どんな風につて、そりやまあ普通に名前言つて、『よろしく願います』つて」

つまらなそうな顔をする鈴。

「それだけ？」

「それだけだよ。他に言うことあるか？」

「あるよ！ アリアリだよ！ そんなんじゃ自己紹介失格だよ、イツキ！」

イツキの目の前に迫りながら説得にかかる鈴。いつもよく分からないことを言い出す鈴だが、今回のことについては一理あるかもしれないと少し思った。クラスの中でも地味な立ち位置のイツキ。もう少しくらい垢抜けても良いのではないかと彼自身も考えていたのだ。

「そんじゃ、どうすりゃ良かったと思うよ？」

「普通過ぎるんだよ、さっきのは！ 私みたいに臨機応変にアレンジを加えつつ自己紹介したほうがいいって！」

あの奇抜な自己紹介は鈴なりの創意工夫の結果だと知って、その彼女の努力にイツキは少し感心した。

「そうだねえ」と、鈴は腕組みをして考える仕草をする。

「貧乏神の『神』に、村八分の『村』、いつ来ても誰もいないの『イツキ』で神村イ——」

「——いじめられるよおおおおおおおおおおお！！
絶対いじめられるってえええ！！ 何いきなり自分からネガティブキャンペーンしてんだよおおおおおおおおおおおおお
おおオオオオツツ！？」

今日も緩やかに時間が過ぎる。

出会った日のこと

神村イツキと雪城鈴が出会った日。

それは彼のありふれた日常の切れ端に登場する脇役の内のひとりに過ぎなかった少女が、一気にヒロインの座を射止めたオーデিশョンかのようなだった。

その日、イツキは終業式を終えていつもの帰り道を歩いていた。明日からは春休み。足取りは普段よりも断然に軽い。何をするでも、何かわくわくするような計画があるわけでも、カノジョと遊ぶでもない。そもそも彼にはカノジョなる存在などいない。そんな極普通過ぎて特筆して述べるようなところなど何もないような彼でも、明日から二週間と少し自由の身でいられると思うと心がわき立つような気持ちになる。ガラにもなく「何か面白いことないかな？」なんて思ってしまう。

「……！」

イツキの思いは、意外とあっさり神が叶えてくれた。

彼は一人暮らしの自宅へと進めていた足を、思わず止めてしまった。

まるで時間が停止しているかのような錯覚に陥りそうになる。

商店街の喧騒からも離れた住宅街、彼の視線の先には見たことのない少女。

一言で、とても美しかった。

昼下がりの日光がその少女の流麗さをより一層際立てる。

一人佇む少女は不安気な表情を浮かべ、何かを探すように辺りをキョロキョロしている。

これは自然に話しかけられる絶好のチャンスではないか。

一瞬、彼はそう思った。

道に迷ったのであれば、親切心として道を教えてあげる。人としてあるべき行動。別にその相手が美少女だから、などという訳ではない！ と彼は自己弁護をする。

——だがしかし、いかんせん彼にはその一步を踏み出す勇気がなかった。

もし話しかけることが出来れば、知り合いになれるかもしれないのに！

友達になれるかもしれないのに！

上手く行けばメールアドレス、電話番号でもゲットできるかもしれないのに！

「ありがとうございます！ 今度お礼がしたいので、お暇な時間があれば、またお会いできませんか？」なんていう展開が待っているかもしれないのに！

あわよくばカノジヨに——

——しかし。

しかしやはり話しかける勇気がない。あと少しでその少女の横を通過しきってしまう。実に惜しい。少しでも時の流れが緩やかになればいいのに、なんて有り得るはずもないことを思ってしまう。

一步、二歩、……。

ああ、彼は通り過ぎてしまった。

彼の青春のページはまた何の進展もなくめくられて——

「……イツキ？」

——聞き間違えだと思った。

イツキは彼の名前。神村イツキ。

初めて会ったその少女が彼の名を知る由もない。

「イツキ……だよね？」

しかし、その少女は間違いなく『イツキ』と言っていた。

「え……。俺……？」

振り返った彼は質問をし返す。

「やっぱりイツキなんだね！」

その少女はそう言うと言先ほどの不安そうな表情とは打って変わってぱっと明るく咲き、彼に飛びついてきた。

「うわ、え！？ 何、何なんだ！？」

「私は雪城鈴と言います。よろしくね！」

鈴に抱きしめられた胸の中で自己紹介をされた。色々なシチュエーションがあるだろうが、こんな積極的な自己紹介をされたのはイツキが初めてだろう。

「ユキシロスズさん……？」

いきなり抱きつかれたイツキは思わず振りほどいてしまう。

「そう、雪城鈴」

「ええと……、俺とどこかで会ったことありましたっけ……？」

「多分あると思う」

イツキはこんな美少女、一度も会ったことなどない。会ったことがあるのならそれこそイツキがしかと覚えているはずだ。でもそんな記憶全くない。どれだけ脳内ハードディスクを洗い出しても『雪城鈴』と名乗る目の前の彼女は検索に引っかからない。しかし彼女は名乗っていないはずのイツキの名を知っていた。これはどういうことだろうか？とイツキも考えてしまう。

「何で俺の名前を……？」

「わかんない」

簡潔な返答。だが『わからない』ではイツキも何も分からない。そして続けて鈴はとんでもないことを言っただけ。

「私、記憶がないんだ。だから、何でイツキの名前を知っているかなんて私自身も全然分からない。ただほんの少し、断片的に残っている記憶にイツキがいた」

いきなりとんでもないカミングアウトを受ける。記憶喪失など、彼にとつては予想外の展開。テレビやアニメの中でのできごとでしかなかった、非常にリアリティの薄いものだ。

「はあ！？ それってつまり、記憶喪失！？ ウソだろお！？」
もちろんいきなり信じられるものではないに決まっている。

「ウソじゃないよ！」

そんな否定の言葉だけで彼の信用に足るものではない。否定するだけならば誰にでもできる。

「……そんなこと言われてもなあ……。じゃあ、とりあえず警察に行く……？」

「それはダメ」

即刻大否定。

「え……何で……？」

「そうなってしまったら、私はイツキと一緒にいらなくなるじゃない！」

言葉の意図が分からない。

「一緒に居られなくなる」という発言は、雪城鈴自身に「イツキと一緒にいたい」という明らかな意思表示があることを示す。

「『一緒にいらなくなるっ』て………？」

「お願い！」

急に手を取られる。ギュツと握られたその感触はとても柔らかかった。

「え、あ、ちよつと……」

「イツキと一緒にじゃなきゃダメなの！ 一緒じゃないと、私は………！」

『私は』の後に続くセリフは鈴の口からは出てこなかった。

ただ、その訴える鈴の目はとても彼の心を激しく動かすものであった。

どこか泣きたくなるような、感傷に浸っているかのような、そんな思いに駆られる何かがあつて。

可憐で儚い彼女が、今手放してしまうと消え去ってしまいそうな感じがして。

小学生の頃の夏休みの記憶のような、思い出すと涙が流れてしまうような気持ちにさせられる何かがあつて。

彼女の話したことが全て真実だという証拠なんてどこにもない。

だが、彼女がウソをついていないということは本当だと彼は思った。

「……………」

言葉を紡ごうとする彼を、今にも泣き出しそうな瞳でしっかりと見つめる雪城鈴。

「わかったよ……………」

——これが、すべての始まり。

因みに雪城鈴が無理やり神村イツキの一人暮らし宅に押し寄せて

くるのはこの数分後の話。

もし記憶喪失の少女がゲームをする

ある日、鈴はまた新しいものに興味を持ちだした。

テレビの横に置いてあるゲーム機を引っ張りだしている。

「……何これ？」

鈴が引きずり出してきたゲーム機は「プレイステーション3」。某有名ゲーム会社が去年発表したばかりの最新のゲーム機。インターネットのアクセスはもちろん、アカウントの作成より他ユーザーとの交流やオンライン対戦などを実現可能にした、まさに夢の次世代機だ。イツキもこれでよく遊んでいたのだが、鈴が来訪してからは毎日がハラハラだったので、そんな暇もなくなってしまうていた。

「ねえねえ、イツキ。これ何？」

少し埃がかかってしまっているそれを、鈴は手で軽く払う。

「ああ、ゲーム機だ。プレイステーション3つつても分かんねえよな。これをテレビに繋げて遊ぶことができるんだよ。そーい最近やってなかったな」

それを聞いた鈴の目はキラキラと輝いていた。

「今できる？ 今遊べる？」

「ああ、できるけど、するか？」

「うん！！」

鈴は初めてのものに触れたり体験したりする時、とても元気の良し純真無垢な返事をする。今日もそれは健在だ。イツキはそんな鈴を微笑ましく思う。

「じゃ、どれがいい？」

イツキはゲームが大量に入っているプラスチックケースを持ってくる。鈴はそれが床に置かれるやいなや、そのゲームがぎっしり詰まった宝箱を爛々と輝いた目で覗き込む。

「いっぱいあるね！」

「そーだな、俺ゲーム好きだからな。で、どれがしたい？」

「私が選んでいいの？」

「いいよ」

鈴は「わーい」と喜びながら、ガチャガチャと中身を漁る。

イツキはいろいろなジャンルのゲームを持っている。アクション系、RPG、レース、スポーツ、格闘ゲーム。

そして、もちろん……

「ねえ、これは何？」

鈴が奥底から引つ張り出したゲームのパッケージにはいかにも美少女といったキャラクターが描かれている。

「あ」

「何何？ これはどうやって遊ぶの？」

鈴が引き当てたもの。それは――

『ときめいて！ マイスクールライフ』

恋愛シミュレーションゲームだった。

女の子にこの類のゲームを見つかってしまうのは少々恥ずかしい。それがたとえ記憶喪失の少女であっても、気恥ずかしさを感じざるを得ない。

「こ、これは……」

イツキのミスだ。

これがあることを完全に忘れていた。そしてよりによって鈴がこれに興味をもつという不運まで重なってしまうとは。彼は心のなかで嘆いた。だが別に彼にやましいことがあるわけではない。ゲームが好きな人間としてすべてのジャンルに触れておきたかったただけだ。というのが彼の言い分だ。やましいことがないのだったら、別に口ごもってしまうことなんてないと思うものの、やはりため息は出てしまう。

「……これは、その、女の子と会話して、気に入った人を恋人にす

るゲーム……」

それでもやはりイツキは少し気まずさを覚える。女子に説明するなど、実際には恥ずかしいものだ。

「ふうん？ それって面白いの？」

「お、面白いっていうかな！ あの、アレだぞ！？ 俺は色んなジャンルのゲームに手を出したかっただけで！ そんな、これが好きとか——」

「なんかわかんないけど、これにしよう！ イツキ、これにする！」
誰も責めていないのに勝手に言い訳を始めるイツキを尻目に、鈴はこのゲームをすることに決めてしまう。

「……………！」

「どしたの？」

イツキは観念する。本当にやましい気持ちはないので別に構わないのだが、やはり気恥ずかしい。鈴から『ときめいて！ マイスクルライフ』を渡してもらい、ゲーム機にセットする。

「コントローラーのボタン操作は分かるか？」

「ん。ま、だいたい。押してる内にわかってくるでしょ」

適当にボタン操作の練習をする鈴。おかげでオープニングムービーがスキップされる。次に名前の入力画面が出てくる。

「えと、「ゆ」……「き」……」

順調良く自分の名前を入れる。ただこれは男向けの恋愛コミュニケーションゲームなので鈴本人の名前を入れると少々変なのだが、イツキはその辺は目を瞑る。

「あ、始まった！」

ゆきしろすず『俺はゆきしろすず。この学校が今日から俺の――

――

「…………俺」だって。主人公は男の子なのかあ」

恋愛シミュレーションゲームをする人は大体が男である。

イツキはあえて静観。

初めてするゲームに口を出されることはゲーム好きにとっては流罪に値する行為だと思っているからだ。

ゲームは会話中心ということもあって、何ぶんつまる所もなく進行していたのだが……

藤田あかり『あ、すずくん！ 今日一人で帰るの？ じゃあ一緒に帰ろうよ！』

本作ヒロイン藤田あかり。彼女を落とすことがこのゲーム最大の使命だ。

「この人さつきからしつこくない？」

まさかのクレーム。

ヒロインからアタックしてくれているのに邪険に扱う鈴。

ゆきしろすず『うるさいな、俺は一人で帰りたいんだ』

藤田あかり『ご、ごめんなさい。そうよね、一人でいたいときもあるわよね……』

「ふふん、言う時は言ってやらねば！ でも拒否の選択肢が何でキレ口調なんだろ」

してやっつたりのつもりの鈴。

その非情な返答の選択に、イツキは藤田あかりに同情する。

その後鈴は暴虐の限りを尽くした。

体育祭では必死にアプローチをかける藤田あかりを振り切り他の女子と組んで優勝。帰り道のたびに最悪の選択肢。会う度に拒否の選択。更に他の女子にも気があるふりをしてはデートの日は家に引きこもるなどの謎行動。これでは誰も寄ってくるはずがない。

そして、当然結末は――

ゆきしろすず『結局、俺の青春は誰とも付き合うことのない灰色の学生生活で幕を閉じてしまった。ああ、もう一度最初からやり直すことが出来ればなあ……！』

B A D E N D 【データを消去しました】

「……」

「……」

悲しいBGMが流れる。

「……イツキ」

「え？ あ、ざ、残念だったな！ でもまあ初めてだし、仕方ないっていうか！」

「このゲームつままない」

そう言くと、すぐにゲーム機からソフトを引っ張り出してパッケージにしまい込む。少し不機嫌そうな感じがする。

「女の子はダメだね。こっちの心理、ひとつも分かってくんないんだもん！ 冷たくするのも戦略っていうじゃない！ そんな基本的なことも分かんないなんて、所詮は機械だよ！」

記憶喪失の女の子におもいきり叩かれる『ときめいて！ マイスクールライフ』。しかし最悪な選択肢を選びまくった鈴に原因があるのは一目瞭然だ。ただ、それを今ご立腹の鈴に言うときつと怒るだろうから、イツキはそれ以上の言葉を口にしなかった。最後には「藤田あかりはロクでもない男を掴まされるね」などという捨て台詞まで吐かれる始末。鈴は藤田あかりに何の恨みがあるのだろうかといツキは勘ぐってしまう。

「次行こう、次！ ああいうのは私には合わなかったんだよ！ きっと！」

再びゲームの山に手をつ突っ込んで、次なるゲームを探す。

「これは何？」

鈴が手に取ったゲームは『列車にGO』。

日本各地の鉄道をリアルな背景を鑑賞しながら走る、運転士気分を味わうことのできるゲームだ。

「電車のゲーム」

「電車を運転するの？」

「そつだよ」

「おもしろそう！」

早速ソフトをセットする。

（5分後）

「？ コレ、なんて読むの？」

画面には『GAME OVER』の文字。

「ゲームオーバー……」

「えー！ もうダメなの？」

「そりゃそつだよ！！ 開始早々120キロ全開で走りだす丸の内線って聞いたことないよ！ いきなりATS作動じゃねえか！！ 南阿佐ヶ谷駅の乗客乗せる気なさすぎだろ！！」

ATS：自動列車停止装置。

電車が信号などを無視して冒進した時、暴走運転を行った時など、危険を察知した際に強制的にブレーキをかける装置。これが発動したということは、鈴は完全なる暴走運転士であったということだ。

「……………面白くない。全然うまく行かないんだもん」

ぼつりと一言呟く。

「最初のうちは仕方ない部分もあるけど、鈴の場合はヒロイン冷遇だしいきなり電車暴走だし、なんというか擁護する点がないよなあ」

鈴はコントローラーを傍らにおいて、首を捻り体操をしている。

「こんなに面白くないものにハマるなんて、イツキはDMなの？」
「違うよー!!」

その後イツキは狙撃ゲームを鈴とタツグでやってみたが、彼女に至近距離で銃殺されたからすぐに止めた。

決戦前夜

鈴が台所で何かを作っている。

いつものだらしない格好にエプロン姿が異様に似合っている。台所からは何かをかき混ぜるカシャカシャという音が聞こえてくる。イツキはその姿を後ろから眺めるが、その瞳は心配の文字で埋め尽くされていた。

「でーきたー!!!」

鈴が冷蔵庫から取り出した料理を頭上高く突き上げる。どうやら冷やして完成するものだったようだ。そしてクルツとこちらを向くと、小走りでそれをイツキの見守る居間まで持ってきた。

「……これは杏仁豆腐？」

「そうだよ！ 作ったから食べて！」

ちよつと茶色っぽい。イツキの知っている杏仁豆腐はもっと白い。

「何か茶色っぽいんだけど」

「隠し味だよ」

「隠れてないな。結構自己主張してるぞ」

真ん中のさくらんぼが砂場に放置された赤いスコップのようだ。

鈴は「いいから食べてみてよ！」とイツキを促す。いつもは鈴のハズレくじを思いっきり引かされるイツキだが、今回の杏仁豆腐の茶色の原因はシナモンの可能性がある。それならば間違っても甘すぎるだけで済むだろうと、イツキはスプーンを進めることにする。

イツキが杏仁豆腐をスプーンで掬い口に運ぶさまをワクワクしながら見つめる鈴。

「#6」

ぜんざいやお汁粉に少量の塩を加えると甘さが引き立つというのは事実。科学的にも証明されている。鈴はこれを覚えていたのだ。今回の事件はうる覚えだった故に招いた惨事だと言えよう。

「……あのなあ、そういうのはあくまで隠し味程度なんだよ……。ぜんざいに大量の塩昆布がついてきたら嫌だろ？」

「うーん……。それでも私なら全食べちゃうかも」

鈴は細身ながら意外と何でも食べる。

「そ、そうか。で、塩は分かる。山椒とコショウと唐辛子も百歩譲って分かるでしょう。だが納豆！ これは何のつもりだ？」

ひき割りだったためあまり目立たなかったが、不味さの根源にはこの存在が大きかったのだらう。

「好きだったから」

「納豆はフルーツじゃありません！」

杏仁豆腐はそそくさと冷蔵庫に片付けられた。神村家の家訓には『食べ物を粗末にするべからず』というものがある。幼い頃からその教えの下に教育を受けたイツキは今回の塩辛いタイヤのような味のする杏仁豆腐も捨てられる決心がつかなかったので、少しずつ食べて処理する方針を採用した。

「鈴が作ったんだから、鈴も手伝えよ」

「えー……」

明らかに嫌そうな表情を見せる。

「『えー』じゃないだろ！ 製造物責任法に則った正当な裁定だ。本当は鈴が全部食って欲しいくらいのところを譲歩してやってんだから、文句言わない！」

「PL法ってやつだね。仕方ないなー」

「おお……、そう、それ」

所々覚えている鈴にたまに驚かされる。ましてやPL法などとい

つた一般人にはあまり縁のない法律名だ。もしかすると鈴は記憶を無くす前は博識だったのかもしれない、と彼は思った。

「そもそも、何でいきなり杏仁豆腐なんて作るうと思ったんだ？」

「調理実習の練習」

イツキは思い出した。明日の金曜日、家庭科の時間に調理実習があつたのだ。

「ああ、そういやそんなのあつたな」

「そうだよ、女子としてここで女子力があるところを証明しとかないとね！」

「女子力ないところを思いつきり俺に見られた後だけだな」

鈴はハッした表情を見せる。

「い、今のは無効だよ！ さすがに！」

「何がどう『さすがに』なんだよ……。そもそも鈴が半ば無理矢理に食わせる展開に持っていったんじゃねえか」

「——！ とにかく！ 今のは無効なの！」

顔を真っ赤にしてムキになる鈴。これ以上責めると鈴の機嫌がとて悪くなるのをイツキは知っている。なので言及するのはここで打ち止めにしておいた。

明日（次話）は調理実習。

調理実習！

私は流浪の剣客……。

今宵も血を啜らんとする我が刀の赴くまま、流離い歩く……。

突然、後ろから刺された。

私は死んだ。

「——という夢を見ましたッ！」

「……鈴、何か不満があるなら謝るよ……？」

清々しい朝である。

朝ごはんには昨夜作成された塩辛いタイヤ（杏仁豆腐）が食卓に

出された。イツキは覚悟を決めて一気に水で流し込んだからまだ良かったものの、その味を甘く見ていた鈴は聞いたことのないような唸り声を上げながら涙目で完食していた。そのせいでテンションの下がった二人はそのまま学校へ向かったが、学校が近づくに連れ鈴は徐々に元気になっていった。対するイツキはテンションの低いまま。切り替えがきちんとできる鈴を羨ましく思いながら校門をくぐった。

「次は調理実習だね！ 鈴！」

3 時間目の休み時間。

クラスの生徒たちが家庭科室へ赴く中、早坂千秋が鈴に話しかけてきた。千秋は肩ほどまでの髪の毛と健康的な可愛さのある、イツキと鈴の同級生だ。鈴ととても仲が良い。

「うん！ 昨日練習しちゃったよ！」

「ええ！ やる気まんまんじゃん！ ケーキ作ったんだ？ 班が一緒だから心強いなあ」

「え……………」

「……………」

千秋は少しだけ首を傾げる。

「……………うん……………」

鈴は明らかに項垂れる。漫画で表すならば、うつろな目の辺りに黒の縦線が何本も入っているといったところだ。

早坂千秋は悟った。鈴の沈黙が何を物語っているか、手を取るように分かった。

「——あ、す、鈴！ 大丈夫だって！ たとえ違うものを作ったとしても練習したことに価値があるんだよ！」

「そうかなあ……………」

さつき肯定の返事をしたのに、肩をすくめて直ぐにミスを認める鈴。千秋はそんな素直な彼女を同性ながらも少し可愛く思ってしまう。その会話を後ろで聞いていたイツキは、先程に増してテンシヨ

ンの上がる要素をえぐり取れた気分だった。「俺はただ鈴の失敗料理を食べさせられただけだったのか」という、結局何も収穫のない犠牲を払ってしまったことになったのだから、そんなふうな気持ちになるのも分らないでもない。だから友人に「どうしたんだ？調子悪いのか？」と聞かれても、イツキは作り笑いを浮かべて「何でもないさ」と答えるくらいの対応しか出来なかった。

家庭科室には2×3の配置で調理台が設置されている。雪城鈴、神村イツキ、早坂千秋は偶然にも同班。5人班が基本なので、後二人は男子が編入されている。

「な、なあイツキ！俺達ラッキーだよな！」

「へ？何が？」

そわそわする友人二人。

「だってよ、ロリ巨乳童顔の鈴ちゃんに超可愛い千秋ちゃんと同じなんだぜ！？ああ、他の男子の舌打ちがまるで祝福の喝采のように聞こえてくるようだ！」

イツキの左に座っている男友達二人が勝手に小声で盛り上がっている。

鈴は身長147センチながら、それに似合わない胸を携えている。だからイツキは彼女の風呂上りの時など視線のやり場に困ることが多々ある。鈴はそういうことに無頓着などころか、からかってくるのでいつも対応に困っている。

「——！——だよなあ！お前もそう思うだろ？イツキ！」

「え？あ、ああ。そうだな」

脳内で鈴の苦労話に花を咲かせていたイツキは友人二人の会話など完全に黙殺していたので相槌だけしか打つことが出来なかった。二人は鈴と千秋に憧憬を抱いているようだ。いや二人だけでなく、鈴と千秋はクラス中どころか学年単位で人気がある。だが、千秋はよしとして、彼らは鈴の蛮行の数々を知らないから憧れを抱けるのだ。ついこの前も買ってきたばかりの香りつきの石鹸を食べ物だと

勘違いして齧っていたし、炭酸飲料を劇薬だと思っていたらしいし、赤ペンを見て「血だ！」と騒いでいたし、モニターがパソコン本体だと思っていたらしいし、赤信号は『覚悟を決めて渡れ』のサインだと思っていたくらいだ。鈴は彼らが想像するお姫様のような優美で嬋媛な女性ではない。少なくともイツキはそう思っているのだから、そんなこと考えるんだよ」と心のなかでため息を付いてしまふ。だがそんなことも口に出して言えるはずもない。彼が鈴と同居していることがバレるのは絶対に宜しくない。記憶喪失と同じくらいトップシークレットの機密事項だ。これがバレてしまえば騒ぎになるどころの話ではないだろう。鈴もそのことはイツキから厳しく言われているので決して口にすることはない。

ホワイトボードには「チーズケーキの作り方」とでかでかと書かれている。その文字を見た鈴は、またひとりで小さく落ち込む。

「鈴は間違って何を作っちゃったの？」

うつむく鈴に優しく問いかける千秋。

「……塩辛いタイヤ」

「何それ!？」

因みにこの早坂千秋は小学生の頃のイツキの幼なじみ。偶然にも高校で再会することができたのだが、当時より増して数段以上も可愛くなった千秋を見た時の衝撃はイツキの胸にまだ印象深く残っている。

先生が各自指示を与え、調理実習はスタートする。

【バイクドチーズケーキのレシピと作り方（一人分）】

・クッキー（市販） 50g

・バター 30g

・クリームチーズ 250g

・サワークリーム 50g

- ・グラニュー糖 70g
- ・卵 1個
- ・生クリーム 100g
- ・レモン汁 小さじ1
- ・薄力粉 10g

？クリームチーズをレンジで柔らかくしておく。同時に薄力粉もふるいにかけておく。

？クッキーを砕き、溶かしたバターを加えて揉み合わせる。（これがケーキの一番下の生地になるので、型に敷き詰めておく）

？ボウルにクリームチーズとサワークリームを入れて、よくかき混ぜる。

？グラニュー糖を2、3度に分けて加える。

？更に薄力粉も追加し、混ぜる。

？次に、卵を2回に分けて加えかき混ぜる。

？完了したら、同様に生クリームも2回に分けて加え、かき混ぜる。更にその後にレモン汁も加える。

？？の上に？？で完成したものを流し込む。

？170 のオーブンで50分焼き、完了後適度に冷やす。

完成！

（『甘

味王のレシピ』様より）

調理は滞り無く行われた。

イツキなど男子二人はかき混ぜる等の力仕事を任され、全体の指示は千秋、鈴は細かい仕事を任された。鈴に細かい仕事を任すのはとても危険だと思っていたイツキだが、今回は周りに塩などの余計な調味料がなかったので鈴も迷うことなくこなすことができていたみたいで安心して見ることができた。逆にクッキーを粉々に砕きす

ぎた男子達が千秋に注意されるくらいが唯一の失敗で、鈴は何もおかしいことをしなかった。それどころか一度見たレシピを間違うこと無くそのまま実行し、とても手際がよく見えた。塩タイヤを作った本人とは思えないほどだ。元々杏仁豆腐だつて調味料を大量投入したからあのような食べ物ではない味になっただけで、形としてはきちんとしていたのだ。食感も確かに杏仁豆腐そのものだったのだ。以上の観点から考えるに、鈴は実は料理が上手いのではないかとイツキは完成したケーキを食べながら思う。

「美味しかった！ やっぱり美少女が作る手料理は最ツ高だな！」
「おうよ！」

と男子二人はともにご満悦の感想を述べる。

「鈴、料理上手いじゃない！ 何か学校でも通つてたの？」

千秋は男子達が洗う食器を拭きながら鈴に問いかける。

「？ 学校なら今も通つてるよ？」

「へえ、そうなんだ！ 道理で上手いと思つたよ」

千秋はすっかり感服しているようだが、鈴は料理学校になど通っていない。通っているわけがない。イツキの家で同棲（内緒）しているのに、鈴を料理学校に通わせられるお金があるわけがない。「また勘違いしてやがるな……！」と声にしたいけどはいけない状況にもどかしさを感じまくるイツキ。きっと鈴は千秋が尋ねた『学校』を『高校』だと勘違いしたのだろう。記憶が細切れになつている鈴に『料理教室』などという概念などが存在していないとしても不自然ではない。

「ね、イツキ！」

流し台で食器を洗うイツキの横で、洗い終わったそれらを拭いている鈴が話しかける。

「美味しかった？」

「ああ、美味しかったよ」

「女子力、証明できたかな？」

「十分だろ。御見逸しまし——」
ふとイツキは鈴の顔を見る。

「良かったあ！！」

雪城鈴の満面の笑み。

「——！！」

イツキは思わずドキッとしてしまった。
いつも見ている鈴がこんなにも可愛く見えるなんて、思いもしなかった。とんでもない不意打ちだ。

思ってみればこんな美少女とひとつ屋根の下で暮らしているのだ。ずっと忙殺されていたイツキだが、冷静に思い返してみれば世の男性からデモが起きてもいいくらいの幸運。

「お、おう……」

イツキは照れ隠しで視線をそらす。
今まで感じたことのない不思議な感覚だった。

鈴は勉強ができない？

今日はクラス全員の気分が重い。まるで葬式でもあったかのような雰囲気だ。あの鈴でさえ空気を察していつもの元気を抑えているような感じがする。早坂千秋は普段と何ら変わらない様子だが、彼女は別だ。この案件とは全く縁のない、別世界に住む人間だからだ。しかしクラスの九割五分は残念ながら関係者。神村イツキもその内のひとり。逃れる術などなかった。

「それじゃテスト返すぞー」

―― 一学期中間テストの返却の時間！ ――

先生は出席番号の若い順に次々と生徒を教卓前に呼び出し、点数の書かれた、もはや宣告書と化したテストを容赦無く返却する。先生はテストを返す際に一言ずつ感想というかコメントをつけている。項垂れる生徒や安堵の表情を浮かべる生徒、天国行きと地獄行きが分かれる瞬間だ。

「イツキ、どうだった？」

休み時間になり、早坂千秋がイツキの机の前までやってきて話しかけてきた。彼女はいつも点数が良い。高得点マニアかと言わんばかりに80〜90、もしくはそれ以上の点数を叩き出してくる。そのことは高校1年生だった時の千秋の成績表を見ればよく分かる。

「65点」

「超普通だね」

「そうだな。欠点じゃなくって良かったよ」

欠点は39点以下の点数を指す。この点数をとってしまうと、学業単位に響いてしまうので生徒たちはこの数字を忌み嫌っている。

「千秋は何点だったんだ？」

「92点」

「聞かなきゃ良かった」

「ちよつと！ 聞いたって何よ！」

黒板はまだ日直によって消されておらず、先生が書いた最高点が誇らしげに残っている。その点数は『92点』。早坂千秋のそれだった。

「ちよつと答案見せてよ」

早坂千秋はイツキに自分の答案を手渡す。几帳面に折りたたまれたそれを開けてみると、当たり前だがほとんど正解の丸がついている。しかも点数が引かれているところは三角だけであって、バツは一問もなかった。

「……。外国なら千秋は8点だな」

外国では丸を不正解、チェックを正解としているところがある。

「残念日本でした」

「はあ。なんでそんなに点数良いかな……」

イツキ自身も不毛な問だとは分かっているのだが……。

「勉強したから」

その通りである。それしかない。

ただイツキも勉強をしてない訳ではない。自分が納得行くまでとはいかないが、それなりにはきちんとしている。点数は見ての通り、何も栄える所もなく収まってしまふ。65点は誇るほどの点数ではないが、別に恥じるような低得点というわけでもない。だが幼なじみがクラス最高点を取ってしまったのは、イツキの自尊心を軽く突付くものがあるのだろうか。どことなくやり切れない表情を浮かべる。

「鈴はどうだった？」

鈴はイツキの右斜め前の席に座っている。席が近いのは彼にとってもとても都合なので、この幸運には感謝している。

「どうって、何が？」

「テストのことよ」

「そう、テスト。何点だった？」

因みに今日返却されたテストの教科は英語。高校2年生の彼らに課された内容は決して簡単なものではない。しかも彼らの通う高校は俗にいう『進学校』であるということからも、その難易度が中々に高く設定されているのは御察しできるだろう。

「ああ、テスト。さっきのだね」

そう言うとおもむろに机の引き出しからテストを引っ張り出す。

「6点だった」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！？」

大絶叫。

6点。

100点満点中、6点。

千秋が焦りながら、「ちょっと見せて！」と鈴から答案を奪い取る。

「……本当に6点………」

イツキも千秋の奪い取った答案を見たが、紛いもなく6点だった。大絶叫の後の不気味な沈黙。

「……ねえ鈴、勉強した？」

顔を引き攣らせながら千秋が尋ねる。

「してなかった」

ケロリと答える鈴。状況のヤバさが分かっていないようだ。イツキもその鈴の発言通りの記憶しかない。確かに鈴は勉強など全くしていなかった。『ときめいて！ マイスクールライフ』で藤田あかりから逃亡する日々を送ったり、塩タイヤ作成に精を出していたり、勉強している描写など全くなかった。こう思い返してみると、この点数はさすがに当然の結果だ。

「ええー！ ダメじゃない！ ちゃんと勉強しなきゃ！」

自分のことのように焦る千秋。イツキも内心は焦りまくっている。まさか鈴が勉強のできない子だったなんて思いもしなかったのだろうか。そもそも勉強以前に記憶がないのだから、そんな努力は最初から無駄だったのかもしれないが。

「えへへ」

「『えへへ』じゃないだろコレ……。ていうか逆に何が合ってたんだ？」

鈴の答案をくまなく見る二人。

『問12 イ』

これに丸が付いていた。

「おい！ イて！ イてエエッ！」

「勘で書いたら合ってたんだ！ 天も見捨てたもんじゃないねえ」

「見捨てられまくってるよ！ これでもかっつけてくらい見捨てられてるよオ！」

『裏面 問40 イ』

「……鈴、分からなかったら『イ』にしてるの？」

「恐らくは」

「自分で書いたのに何で他人事みたいな言い回しなんだよ……」

この2問で6点。それ以外は紛れも無く全てバツ。面白いくらいに全部バツ。三角さえ与えられない程にバツ。バツの嵐だった。

『次の和文を英文にせよ。 1： 私たちは世界中の恒久の平和を心から願っている。』

【鈴の答え】

『We are p e s s i !』

鈴に回答を返す際に一瞬だけ見えたこの答えに、イツキは戦慄を覚えた。

「鈴！　鈴！　これはマズいって！　先生のところ、相談に行こ？　ね？」

千秋は他人事ではない様子で心配する。確かにこれはとてもマズい。イツキもこの意見には大賛成で、半ば強引に鈴を職員室まで引っ張っていった。

「失礼します」

3人は行儀よく扉を開け、挨拶と一礼を済ませる。

「あの、先生」

「おお、どうした？」

顎にうつすらと髭を生やした、40代前半の英語教師。愛嬌のある顔と陽気な性格でクラスの皆からも慕われている先生だ。

「あの、雪城さんのことなんですが」

「ほら鈴、自分のことなんだから自分で言えよ」

イツキに肩を押されて最前面に押し出される鈴。

「……あの、私は6点なんですけど、大丈夫なんでしょうか？」

鈴の6点発言に思わず再び吹き出しそうになるイツキ。これは少しジワジワくるものを感じているようだ。だが千秋の「笑ってられる状況じゃない！」という視線に気付き、こみ上げてくる笑いを必死に噛み殺す。

「ああ、ま、大丈夫じゃないか？」

先生の口から出てきたのは、彼らの予想を良い意味で大きく裏切

るものだった。

「そうですか！　ありがとうございます！　ね、二人共、私だいじよ——」

「何で！？」

イツキと千秋は同時に尋ねる。先生はその剣幕に一步引いてしまふほどだった。

「だ、大丈夫なもんは大丈夫なんだから仕方ねえだろあ？」

「6点ですよ！？　6点！！　このままじゃ雪城さん、留年しちゃいますよ！」

1年を通しての各教科の平均点が39点を下回ると自動的に留年が決定してしまう。

「……雪城の現在の英語の平均点は53点だ。転校生はお前らと違って入試の点数も大きく考慮されるんだよ。その結果分の貯金があるから、まだ大丈夫だ。ま、6点には俺も笑わしてもらったけどな」

二人は「え……」と言葉を失ってしまった。

6点をとって平均点を53点にする方法。

簡単な方程式だ。

$$(6 + X) \div 2 = 53$$

「100点……？」

イツキと千秋は驚嘆してこれ以上の感想を述べる事が出来なかった。あの「We are pessimist！」などと真剣に書くような子が、進学校の受験で100点。とても信じられなかったが、先生が嘘をつく義理もない。しかも、本当に紛れも無い真実なのだから認めざるを得ない。

「なあ、鈴。おまえ……」

振り返ると鈴は何でもないような表情で二人を見ていた。

「ね、心配なかったでしょ？」

可愛らしげに微笑む鈴。

受験は、おそらく鈴が記憶喪失前に受けたものだろう。

——記憶喪失前の彼女は一体、どんなヒトだったのだろうか？

鈴の謎がまたひとつ増えた瞬間だった。

鈴は勉強ができない？（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

幕間 ～一学期中間テスト 鈴の誤回答集～

～～幕間～～

鈴の誤回答集

【英語】 点数：6点

次の和文を英訳せよ。

問：『現在のアメリカにおける経済政策は、日本に多大な影響を与える可能性が高いものである。』

【鈴の答え】

『The economy of America will be Japanese.』

問：『10時から12時は車の通行が多いため、この通りを渡るときは注意しないといけない』

【鈴の答え】

『(Th↑消した跡) イ』

次の英文を和訳せよ。

問：『We were not able to believe the occurrence which happened in the gym.』

【鈴の答え】

『ジムの体内では私達が信じられないことが起こっていた』

【国語】 点数：84点（クラス3位。現代文満点、古文全滅）

次の古文を現代語和訳せよ。

問：『つれなき顔なれど、女のおもふことといみじきことなりけるを、』

【鈴の答え】

『つれない顔をしているけれど、女が思うことっていつも顔に出ないのでしょ』

問：『次の単語の読みを書け。』

？蔵人 ？上達部 ？刀自 ？女御

【鈴の答え】

？クロード ？じょうたつぶ ？ばじ ？によい

【数学】 点数：86点（クラス2位。計算問題応用問題は全て正解。特殊な方程式を使う部分は全滅）

問：0 $\theta > 2\pi$ のとき、 $\cos(2\theta - \pi/4) \parallel \sqrt{3}/2$ を求めよ。

【鈴の答え】

『解なし』

その後分からない問題には全て『解なし』と回答。

【生物】 点数：46点

次の生物の名前を答えよ。(写真)

答え：？ボルボックス ？ミジンコ ？ミカヅキモ ？ゾウリムシ ？プラナリア

【鈴の答え】

『？リーゲルシュライダー ？虫 ？ヒューイット ？ゲアー ？シエンデロス』

問：『個体がホモ接合体YYの遺伝形態を答えよ』

【鈴の答え】

『死』（正答：致死遺伝子）

【日本史】 点数48点

空欄を埋めよ。

問：（ ）は洒落本の作者であり、（ ）は黄表紙作者である。

【鈴の答え】

『（馬子）は洒落本の作者であり、（馬子）は黄表紙作者である。』

問：大津事件で負傷したロシアの帝国大使は誰か。

【鈴の答え】

『チエブラーカ』

計5教科270点、全教科平均点54点。

学年158人中76位。

普通……？

幕間 〱 一学期中間テスト 鈴の誤回答集 〱 (後書き)

話の進行とは全く関係の無い小話です。

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

絶対に負けられない戦いが、そこにはある

一学期の中間テストが終わって、もう5月も半ば。

夏の足音を感じ始めるこの頃は、その前の恒例行事である梅雨がやってくる季節でもある。鈴は雨が降るたびに、つまらなそうな顔をしながら閉めた窓から外を眺めている。鈴は元気で活発な女の子だ。強制的に部屋の中に閉じ込めさせられる雨は、きつと嫌いなのだろう。確かに鈴は部屋に閉じ込めておくよりも草原や野原で自由に駆け回らせるほうが似合っている。例えばスイスのような清涼な高原を白いワンピース、白い帽子で駆け巡る姿なんて簡単に想像できくらいだ。体を動かすことができなくてウズウズしている様子がよくわかる。鈴が深い溜息をつくときは、たいていつまらない時。ついこの前がまさにその時であった。

2時間目が終わるチャイムが学校に響き渡った。

「よっしゃー！」

鈴はガタツというイスの音と共に立ち上がる。

そしておもむろに制服のカーディガンを脱ぎ、リボンを外し、シヤツのボタンに手を――

「――！！　ちよ、ちよッ！　ちよつと鈴――！」

早坂千秋が脱兎のごとく駆けつけ、自分のシヤツのボタンを外す鈴の手をがっしりと押さえる。イツキも急いでその奇行を止めるべく半歩踏み出していたのだが、それでも千秋のほうがずっと速かった。

「何してるの！？　」

「え、着替えようとしたんだけど……」

次は体育の時間。

鈴が待ちに待った体育の時間。

ずっと雨に降られてフラストレーションが溜まりに溜まった鈴が思い切り発散できる体育の時間であったのだ。

「まーだーダーメーだーよーッ!!」

千秋は鈴の手を握っていた手を両肩において必死に説得する。

「男子がッ！ 男子がいるでしょう!？ 何のための更衣室!？」

見渡すと、男子の視線は鈴に大注目されていた。不覚にも、止めに入ろうとしたイツキもその内のひとり。いつも鈴と一緒にいるとはいえ、このようなシチュエーションで心躍らないわけがない。あと少しで下着が見えてしまう絶妙のボタン位置まで来て千秋に制止されてしまったものの、逆にその光景が男子としてはそるものがあるのか視線は集まったままだ。美少女が美少女に過ちを犯さないように必死に説得する姿は、その説得内容がどうであれ何処と無く美しく映える。…… ような気がする。

辺りを見回す鈴。鈴と目があつた男子達は顔を赤らめながら急いで視線をそらす。

「うーん、じゃあ早く行こうよ！ 更衣室!」

「分かったけど、ボタンはちゃんと閉めてネ!？」

はやる気持ちが鈴を急がせる。

イツキはこの一部始終をほとんど何も出来ずに傍観してしまっていた。彼としても制止に回リたかったところだが、突然のことで対処が遅れてしまった。イツキは千秋に土下座級の感謝を心のなかで行った。

「なあ、イツキ」

調理実習の時一緒だった男子生徒の友人が話しかけてきた。

「俺は、鈴ちゃんはSだと思っんだ」

「…… はあ？」

「見た感じMっぽいのに実はSで、しかもあの誰もが可愛いと認める天使のような容姿！ 天は二物を与えたな!」

悟りを開いた哲学者にでもなったかのような口ぶり。確かに鈴の容姿は非の打ち所が無い。

「きっと、ベッドの上でも——」
「お前は何を言っているんだ」

外は快晴。

雨上がりの人工芝の校庭は、雫が日光に反射してキラキラと輝いている。

「鈴は元気だな……」

体操着に着替え終わり、校庭に出たイツキは独り言のようにポツリと呟く。女子と戯れる鈴はとても活き活きとして、気持ちが悪そう。それを確認したイツキも少し笑顔になってしまう。

「何、鈴ちゃんを見てニヤニヤしてるんだよ」

「え？ いやいや、そんなつもりは……」

「まあ見るだけなら許してやろう？」

「許す？」

「ああ！ なんてったって『俺の嫁』だからな！」

その発言をしたとたん、彼は男子の渦へと引きずり込まれていった。鈴は人気があるので、そのような発言には注意を払ったほうがいい。イツキは苦笑しながら男子の渦に投げ込まれた彼を見守ることにしか出来なかった。

「……人気あるんだなあ……」

イツキは鈴の人気を再確認する。

あれだけ人気のある鈴を、日常生活で独り占めしている今の状態。イツキは少しだけニヤついてしまう。

しかも全て内密というところがまた、イツキ的にグツとくるものもあるようだ。普段はそんなことを鈴に悟られないような言動をしているが、内心ではニヤつきが止まらない。

「はい、じゃ、今日はひっそびさに晴れたことだし、サッカーでもするか！ じゃあ男子と女子に分かれてー」

上下ジャージ姿の先生が首に笛をぶら下げながら指示を出す。

「わーい！ サッカーだ！」

思いつ切り体を動かせるサッカーは鈴にとっては好都合。イツキは彼女の喜ぶ様子を見て、「サッカー、覚えてたんだ」と脳内で率直な感想を述べる。

女子たちは4チームに分断された。1チーム4人。

「頑張ろうね！」と声を掛け合う鈴とそのチームメイト。

【Aチーム対Bチーム】

Aチームには雪城鈴、Bチームには早坂千秋が所属している。

早坂千秋は容赦などしない。勉強も容赦はないし、小さな勝負事だつて容赦はしない。ましてや目に見えて点数という数字で現れるスポーツなんて、容赦するはずがない。これは彼女なりの流儀なのだ。どんなことであれ、手を抜くことは相手にとって失礼なことであり、同時にそれは自分の予防線となってしまう。この理念に従う千秋に、勝負事で慈悲は期待できない。Aチームの面々もスポーツ万能の千秋のいるチームを初戦で迎えることになってしまい、早くも諦観が見られている。

「皆、どしたの？」

そんなことを全く知らない鈴はチームメイトに尋ねる。

「千秋が相手にいたら、勝てる気がしないよお」

「そうそう、千秋は運動もできるからねえ」

既に諦観の漂うチームの雰囲気。

「そんなにスゴいの？」という鈴の質問も、質問途中に肯定されるほど。鈴は「よっぽどなんだ」と悟る。だがそこで同じように諦観に染まるのではなく、それどころか「へえ」と不敵な笑みを浮かべた。

五月晴れの校庭、気温24、時刻午前10時。

Aチーム対Bチーム、キックオフの笛が鳴り響く――！

絶対に負けられない戦いが、そこにはある（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

意外と真剣勝負

ボールはBチームからのキックオフとなった。

鈴は相手チームの早坂千秋から目を離さずに、味方選手がボールを奪取する瞬間を伺う。だがしかし、一度早坂千秋にボールが渡ると小刻みなボールタッチと一瞬の加速力で鮮やかに抜き去り、最後は一对一になったゴールキーパーまであっさりと躲かれてゴール左に簡単に流し込まれた。

【A0—1B】

「ほら、千秋、凄いでしょ？」

千秋にディフェンスに行っていたチームメイトのひとりが鈴の元に寄る。

「うん、確かにそうだね」

鈴は返事はしたものの、何か考え事をしているようだ。

——Aチームのキックオフ。

Aチームは横一列に並んでフォーメーションを作り、敵がプレスにかかる場所でフリーの味方選手にパスをして好機を伺う。しかしそれを行うにはあまりにも人数が足りない。ゴールキーパーでひとり分のフィールドプレイヤーが削られるので、実質ピッチにいてボールを繋げられる選手は3人。更に、横一列で並んでいるので一人でもミスが出れば即座にゴールキーパーとの一騎打ちの場面を作られてしまう。そう言っている内にまたもパスカットからエースストライカーの早坂千秋にボールがわたってしまい中央をブチ抜かれる。鈴の位置からはいくら走っても千秋に追いつけるような距離ではない。千秋はキーパーの位置を落ち着いて見定め、頭上を抜く

鮮やかなループシュートで本日2点目を決めた。

【A0―2B】

ゴールの祝福を受ける千秋に、やはり諦観色の色濃いAチームの面々。「ああもうだめだ」とか、「何点とられることやら……」などの敗色ムード濃厚な状態。

だが、鈴は違った。2点差を付けられて負けているのだが、「ふん」と鼻を鳴らす。それを見た千秋は「それが負けている人のする表情かしら」と密かに警戒心を強めるとともに、これから鈴が何をしようと企んでいるのだろうとワクワクさせられた。

「ね、皆。ちよつと」

鈴はキックオフ前にチームメイトに何かを告げる。

「……うん、わかった」

「やるだけやってみますかあ？」

2点差もつけられているこの状況。何か策があるのなら、乗ってみるしか道はない。

Aチームのキックオフ。

ボールは鈴が中央でドリブルしながらキープすると、咄嗟に千秋のチェックが入る。鈴もそのことは先ほどまでのプレーで熟知しているので、後方の選手に渡す。

きちんとボールが渡ったことを確認した鈴は思い切り前線を中央から駆け上がった。千秋は後方にパスされたボールにチェックに行くものの、流石にボールより速くは走れないため鈴のパスは成功する。同時にパスを受けたそのチームメイトは思い切り前線にボールを蹴り出した。

（前線へのフィード！ でも大丈夫、後ろにはちゃんと味方がカバーを……）

千秋はチームメイトのカバーに期待していた。

だがしかし、鈴へカバーに行く選手は誰一人居なかった。

他の二人の選手はサイドに張っており、中央、つまり千秋の後ろのカバーは、誰も回っていなかったのだ。

鈴はゴールキーパーが飛ぶ方向とは真逆の方向へボールを流し込み、1点を返した。

「――！！」

過信であつた。

万能すぎる早坂千秋への過信。

これが逆に失点を喫してしまう原因となつてしまったのだ。

千秋が中盤を全てカバーしてくれるので、味方選手は両サイドをケアし、全方向包囲網を完成させていた。鈴はそれを逆手に取ったのだ。最初の失点で千秋はボールがサイドにわたっても動かずに、中央でボールの取り合いになると果敢に参加していた。2点目も同じように中央の突破であつた。その時もサイドは千秋に連動して少し上がるだけであつた。言い換えれば、サイドは千秋のカバーがアシストでしかないということであつたのだ。

つまり、彼女の万能さとチームメイトの過信がこの失点を生み出してしまったということだ。

「……二人共、サイドじゃなくて、私の後ろでラインを頼むわ」

千秋の眼光もまた研ぎ澄まされる。

千秋にとつては敗北も許されないが、やはり失点も許されるものではない。自分が対処すべきところを逆手に取られて点を決められてしまった責任も感じている。勝負事に厳しい彼女にとつてはたとえそれが『体育の授業』であつたとしても、プライドが許さない。千秋は両手で自分の顔をパシパシと軽く叩き、気合を入れ直す。

【A1―2B】

Bチームは千秋の中央突破戦法を引つ込めた。千秋を中盤中央のバランス的な位置に配置し、ラインを上げ下げして味方を裏に飛

び出させる。

この千秋のパスにいち早く反応した鈴は精一杯に足を伸ばし、サイドラインに逃れる。

スローインとなったボールに相手選手が頭で合わせてゴールを狙うも、チームメイトが競り合ったので頭はボールを捕らえることなく通過したが……。

「……」

遠いサイドで千秋がフリーになっていた。

「もらった！」

千秋は素早く右足を振りぬく。綺麗なダイレクトボレーだ。だがそれでも鈴が体を投げ出してカバーに入る。

ボールは勢いを失いゴールキーパーにキャッチされた。

キーパーはボールを所定位置にセットし、思い切り駆け上がった鈴に浮き球のフライロングパスをだす。

「そこ！」

敵選手が、ボールが落ちきる寸前に鈴にチェックをいれる。

しかし鈴は左足で敵選手の左前にボールをはたいて、自分は相手の右を走りぬき軽々と抜き去り、更に視線で味方選手にパスを出す視線を送る。

「マークついて！」

中盤まで戻っていた千秋がそれに気付いて大声で指示を出す。

しかし鈴はその声に反応し、視線を切って自ら単独突破を切った。出た。

「いかせないよ！」

一気に加速する鈴と、それを止めるべく猪突猛進する千秋。

ドリブルする一方で、フリーランニングの全速力。鈴は追いつかれて横からプレスをかけられるが、体をすくめて左に進路を取ろうと見せかけた瞬間に右へ切り返す鈴のドリブルに翻弄されて振り切られてしまう。

「よし！！ いけえー！ 鈴ー！！」

「止めてえ——！！」

互いのチームメイトの大声援。

鈴とキーパーの一对一だ。

しかし、突如鈴は進行方向ヘドリブルするスピードをほんの少しだけ緩めてしまった。

「！！」

キーパーはその一瞬のミスを逃さず、ボールを保持せんとばかりに飛びかかる。しかし、それは最悪の判断だった。

——なぜなら鈴はミスをしたわけではなかったからだ。

鈴は一瞬だけ勢いを弱めたボールに半身だけ背を向け、左足、足の裏でボールを進行方向に転がしてそのまま加速し、ゴールキーパーを抜き去った。

ボールは無人のゴールへと吸い込まれる。

「……嘘でしょ……！！」

マルセイユルーレットという技だ。

鈴はそれをいとも簡単にやってのけたのだ。

これには千秋も苦笑いするしか無かった。

このゴールが決まったと同時に、笛が吹かれた。

試合は2―2の同点で引き分けとなった。

「いやー！ 楽しかった！！」

鈴はとてもご満悦なようだ。

「鈴ってサッカー上手なんだねー！ 私、びっくりしちゃった！」
と千秋もすっかり感心している。

その鈴の劇場となつた試合を、1年の教室から授業中にもかかわらず熱い視線を送っていた男子生徒がいた。彼は華麗な技を披露しゴールを決めた女生徒を必死に目で追う。

くしゃくしゃになつた鈴の体操服から、彼女の名前がかすかに見えた。

「ゆきしろ……先輩……？」

意外と真剣勝負（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

杉崎友一

鈴が下駄箱で騒いでいる。

このままでは朝一からいきなり超目立ってしまう。イツキは急いで鈴を教室まで半ば強引に引きずるように連れていった。

「いきなり喚き散らすなって！　また変なヤツだと思われないのかあ？」

「手遅れだよ」

確かにその通りだ。鈴にも自覚はあるらしい。

「——それで、何を騒いでたんだ？」

「！　そう！　それ！　それだよ！　そのことなんだけど！」

鈴は一枚の手紙を右手に持っていた。

「何これ？」

「下駄箱の中に入ってた！」

下駄箱の中に入っている手紙といえは……。

「す、鈴……、まさかそれって——！」

もしか、イツキの恐れいていた事態が起こってしまったのだろうか。

大前提として、鈴はモテるのだ。

なぜならとても可愛いし、その上に愛嬌もあって胸もある。そんなことイツキは知っている。彼女が男子から抜群の人気を博していることも十分熟知している。だが、彼は完全にタカをくくっていた。「まさか、まだ1学期中だし、鈴は確かに可愛いけどやっぱり変なヤツだし！　そんなことあるわけない！　ないない！」と心の奥底ではそう信じて疑わなかったのだ。だがその恐れていたことが現実のモノになりそうな今、イツキは焦りで世界がぐるぐる渦巻くような感覚に見舞われる。

「ラブレ——」

「不幸の手紙だ——」

「！！！」

「なんでだよッ!!」

鈴は嘆きながら机に突っ伏す。

「なんでここまで来て不幸の手紙になるんだよ!? ていうか古いな! 不幸の手紙で! 古いな!!」

鈴は一昔前のドラマも再放送で見えています。

「だつてだつて! 不幸の手紙しか有り得ないじゃん! 私不幸になっちゃうんだー! わーん!!」

「鈴の『下駄箱の手紙』のイメージって、それしかないのか?」と思つたが、そんなことを尋ねるよりもっと重要なことがイツキにはあつた。

「鈴、中身読んでみるよ」

小声で鈴に伝える。大きな声だと騒ぎになる可能性があるので、イツキは鈴の耳に手を当ててこそこそ話をするように話した。

「イヤだ! 人の不幸の手紙を見たがるなんて、イツキはとんでもないヘンタイだよ!」

「いや、ゼツツツタイ違うから、読んでみるって」

鈴は全く乗り気じゃないようだ。

「そんなのわかんないじゃん! これで本当に不幸の手紙だったらイツキに5通くらい送りつけてやるんだから!」

想像してみると、とんでもなく鬱陶しい仕打ちである。

イツキはそれでも「大丈夫だから」と無理やりひっぺがして、鈴の机の上にばつと広げる。

『拝啓、雪城先輩。』

是非先輩にお話ししたいことがあります。

今日の放課後、校門の桜の木の下で待っています。

よろしくお願いします。

1年3組 杉崎友一』

この手紙はイツキの言うソレであるようだった。

「……新手の不幸の手紙だね」

「まだ言うかッ!? どう見ても違うだろ!？」

確かにこれはどう見ても「不幸の手紙」には見えない。しかしある種イツキにとっては完全に不幸の手紙だった。人気のある鈴を放置していたツケがこんな風に回ってくるなど、イツキは想像だにできなかった。いつも側にいてくれる鈴がいつの間にか自分だけのものになっているかのような、そんな自分勝手な思いが芽生えていたのかもしれない。何にせよこれは包囲網を張っていなかったイツキのミスだ。手紙の差出人『杉崎友一』には何の罪もない。だから彼が今その手紙を真つ二つに粉碎しようとしているのはとんだお門違いというものだ。

「あ! ダメ!」

鈴はイツキがその手紙を処刑しようとしているのを悟ったのか、さつと取り上げてしまった。

「不幸の手紙は、破ったり捨てたりしたらその人に全ての不幸が――」

「ああああそうだな鈴、そいつは今俺を不幸にしゃがったとんでもない手紙だったぜ……」

目に生氣のない表情に体をゆらゆらと揺らしながら項垂れ、どこからそんな声が出るのだと言わんばかりの低い声で誰にもぶつけれない憤りを噛み殺すイツキ。

「……イツキ、なんか怖いんだけど」

因みに鈴がイツキに突っ込んだのはこれが初めてだったりする。

「……本当に行くのか？」

イツキは金魚の糞のように鈴について行く。
いつもとは逆の光景だ。

「そりゃ行くよ。だってコレ、不幸の手紙じゃないんでしょ？ 違うんだったら、私に用事があるんだから、ちゃんと聞いてあげないと」

「違うけど、俺を不幸にはしたな」

ボソツと呟くイツキの声は鈴に聞こえなかったのか、鈴はチラと視線を合わせただけでハテナマークを浮かべるような表情をするだけだった。いつもは可愛く思うその顔も、『誰かのものになつてしまうかもしれない』と思うと、やりきれない思いが脳内をぐるぐると去来するのも無理はない。

「はあ」と深くため息だつてついてしまう。

「あ、あの人かな？」

花も散り、緑色の葉を青々と茂らせる桜の下で、その男子生徒はひとり佇んでいた。

背は高校男子にしては小さく、おそらく160あるかないかほどだろう。

「——！」

だがしかし、二人がこのように一瞬息を飲んだのはこのせいではない。

「あ、ゆきしろ先輩ですか？」

二人に気付き、言葉を一つ一つ丁寧に紡ぎだすようにゆっくりと話す。

「えと……………あれ……………」

『桜の木の下に來い』と書かれて、その通りに來たら彼がいた。ならば目の前にいるこの人物は間違いなく『杉崎友一』であるはずだ。いつもなら「早く行けよ」という主旨の指摘がイツキから飛ぶはずなのであるが、その肝心のイツキさえも鈴と同じ心境になってしまっていた。

「……………どうかしましたか？」

そのおっとりとした端正な顔立ちは確実に女子のように見える。しかもかなりグレードの高いほうだ。更に声までも男か女か分からないような絶妙の高さ。しかし來ている制服はイツキと同じ男子用の制服。

——困惑せざるを得なかった。

「あ、あのさ、もしかして、君が——」

「あ、はい。申し遅れました。私は1年3組の杉崎友一という者です。よろしく願います」

二人は度肝を抜かれた。

俗に言う『美しすぎる』というやつであろうか。

はたまた男の娘というやつであろうか。

彼らの目の前にいる杉崎友一は、女子のような容姿の男子であったのだ。

杉崎友一（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

杉崎優香

度肝を抜かれて、ただ立ち尽くす雪城鈴と神村イツキ。

鈴の表情からも伺えるように、記憶喪失であるうと目の前の現実には疑問符を投じるべき事実だということは理解できたのだろう。

概念が取り払われた鈴でさえ驚きの表情を見せてしまうこの光景は、一般人のイツキにはもっとダメージが大きいものだった。全く関係のない話だが、「何故同じ人間なのにここまで差が……！」などということを考えさせられるほどだった。驚き顔を晒しながら固まっ
てしまっている二人に、首をかしげて疑問符を投げかける杉崎友一。
「どうしたのですか？」

物腰柔らかな語調。

言葉を一文字ずつ丁寧に発音する話し方は、まるでクラスの大
人しい女の子のようだ。

「えと、君が杉崎友一『くん』だよね？」

鈴は「くん」なのか「さん」なのか迷ってしまうが、「友一」という名前を信じて「くん」の判断をする。保険として間違いのないようにわざわざ「くん」を強調した。その前に男子用の制服を着ているので迷うはずはないのだが、それでも確信が持てなかったのだ。「はい、私が杉崎友一です。本日は私のためにわざわざ時間を割いてくださって、有難うございます。私のことは「友一」と呼びびく
ださい」

友一はぺこりと礼儀正しく頭を下げる。小さい背丈が余計に小さく見える。

「あの、突然不躰で申し訳ないのですが、そちらの方は……？」
右手の掌を上にし、イツキの方を指す友一。

「あ、え、俺はその——」

「イツキだよ。神村イツキ」

急に振られて焦るイツキを鈴がカバーする。

「神村イツキさん……ですか……？」

友一に困惑の表情をされるイツキ。確かにこんな男女の色恋沙汰に知らない男がひとりのこのこと付いてこられるのは戸惑ってしまうだろう。イツキは少し申し訳なく思うも、しかしそんなことを言っすごくすこと引き下がっていいような場面ではない。だが、ここに来たからといってイツキに何か言う権利があるのだろうか。

「そう、イツキ」

「イツキさんですか。初めまして、杉崎友一と申します。今後とも宜しくお願いいたします。私のことは「友一」と呼びください」
相変わらずとても礼儀正しい杉崎友一。イツキも思わず同じように敬語で「よろしくお願いします」と返してしまう。

「かみむら先輩は、ゆきしろ先輩の彼氏なのですか？」

唐突且つドストレートな質問にイツキは思いつ切り吹き出す。そして見ていられないほどに取り乱す。いつもなら状況は違えど鈴がこうなるパターンが多いのであるが、今回は全てが真逆だ。

「どっちだと思う？」

鈴はその問いに「ふふっ」と微笑みかけながら友一に返す。友一はぼけつとしたまま、「どっちでしょう」と考えるような素振りを見せる。イツキは上手い返しだなど、正直感心してしまった。

「——それで、友一は私に何の用があるのかな？」

この流れでいきなり本題に探りを入れる鈴。彼氏がいるかいにか分からないまま、友一は用件を言わざるを得なくなってしまった。イツキはハラハラしながらその返事を待つ。

「はい。単刀直入に申しますと、私は——」

イツキは手に汗を握りながら「来るぞッ！」と腹をくくり、ギョツと強く目を瞑る。

「——私はゆきしろ先輩にサッカーを教えて欲しいのです」

イツキは拍子抜けをしてしまった。

本当に体勢が崩れそうになったので、ひとりで踏ん張って持ちこたえる。

「サッカー……？ 私がサッカーを教えるの？」

「はい。そうです。この前のサッカーの授業で、ゆきしろ先輩の華麗な技の数々を陰ながら拝見しました。私はサッカー部に所属しているのですが、どうしても上手になりたいのです。どうか協力してもらえませんか？」

意外と切実な願いだった。イツキはとんでもない方向に勘違いしてしまっていたのだ。とりこし苦労で振り回されていたと思うと、一気に疲れが出てきたような気がした。

「いいよ」

鈴はひとつ返事で了承する。

「でも、私はただ自分ができるだけで、そんな人に教えられるような技量なんて無いよ？ それにサッカー部なら私より上手な人もたくさんいるし、そっちに教えてもらうほうが手っ取り早いんじゃないの？」

鈴にしては大正論だ。イツキもこれには何の突っ込みどころの余地が無い。鈴の真大な質問に、友一はどこか答えづらそうな表情だが、さっと顔を上げてその訳を話し始める。

「私はもつと上手くないと、サッカー部を辞めないといけなくなってしまうのです」

衝撃的な発言だった。上達しないと辞めないといけないなんて、まさかプロの世界じゃあるまいし。あまりにも厳しすぎるのではないか。

「……私は下手なのに、一年生なのに、スタメン（スターティングメンバー。先発選手のこと）で試合に出されるのです。私自身も自分が試合に出るたびに足を引っ張っているのはわかるほど、下手なのです。チームメイトたちも、私が下手なのにも関わらず試合に出

されているので、きっと疎ましく思っているでしょう……。そんな状況を見かねたのか、私の姉が『試合で活躍できないのだったらお荷物になるだけで無様だから、辞めなさい』と……」

友一はいつの間にかまた下を向いてしまっていた。悔しさで声も震えているような気もした。

「……『下手なんだったら迷惑になるから辞めろ』ってか……。キツいことを言うお姉さんだな……」

「いえ！ 決してそのようなことを言っているのではないのです！ 姉はきつと、私のことを思って、このようなことを言っているのです！ もともと陸上しかやっていなかった私を、『サッカーなら陸上の経験も生きる』と言ってねじ込んでくれたのも姉なのです！ 引っ込み思案の私を前へ前へ引っ張っていつてくれたのはいつも姉でした。私はこんな形でサッカー部を辞めたくありません！ 姉の期待に……少しでも応えたいんです……！」

最後はふり絞るような声で言葉を吐き出していた。友一の手は固く握られ、血色が変わってしまったていた。

「……事情は分かったよ、友一」

鈴が友一に近寄り、優しく話しかける。

「……！」

友一は泣きそうになっている顔を上げた。

「でもその前に、友一のお姉さんと話がしたい。お姉さんはいつも、どこにいるの？」

鈴の顔は真剣だった。

「生徒会室です」

「生徒会室？」

イツキと鈴の二人には実に縁のない場所だ。

「はい。私の姉は杉崎優香——。生徒会長です」

杉崎優香（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

生徒会役員達

——飛び交う指示にテキパキと動く生徒会員。

——飛び散る青春の汗と、弾ける笑顔。

学生生活をより良いものへと改善すべく毎日躍動するその姿は、
高校生の憧れの的——……？

「あ——。めんどくさい」

副会長の源達也がパイプ椅子に上体を仰け反らしながら文句を垂れる。短くまとめられた髪がいつもより余計に増して天を指す。

「そんなコト言わないで、ちゃんとやって下さいヨー。ついでに私の分も片付けてくださいヨー」

「イヤに決まってるだろ」

リオは「相変わらずケチですネ」と言いながら本棚から部活申請用紙の整理を続ける。綺麗な金髪が日光に反射して煌いている。

「源、ヤル気がないんだったら別に降りてもらってもいいんだよオ？」

「いつやー、そいつはできねえな。せつかく高倍率の激戦を勝ち抜いて生徒会室にいられる権利を勝ち得たんだ。手離すわけにゃ行かないな」

中央奥の机でハンコを押す作業に追われていた女性徒が源達也に半脅して苦言を呈すが、飄々としている源は慣れた様子でこれを躲けてみせた。

「杉崎会長まじ怖いッス！ やばいッス！」

リオのふざけ気味な反応にジロリと視線を向ける会長。リオはその視線に気付き、すぐに「ってタツヤさんが言ってたましタ」と言い逃れをした。とんだ流れ弾に「ふざけんなバカヤロウ！」と声を上

ずらせながら大否定をする源達也。

「で、リオは書記の整理はできたの？」

続けざまに聞いただす会長、杉崎優香。

「できましたヨ！」

「あら、できてないと思ったんだけど、ちゃんとやったんだ！ 源と違っていい子！」

「そうです！ 私はミナモトみたいなウドの大木とは違うんですヨ！」

弾ける笑顔を見せるリオの後ろで「おい！」という源の声が聞こえてきたが、もちろんそれは華麗にスルーされる。

「どれどれ、見せてよ」

リ才は杉崎優香会長のさし出すその手に、「はい」と簿記書類を渡す。

.....

.....

.....

.....

「何語だよオツ！」

ビターンとソファアーに叩きつけられる書類。

「何語だよコレエッ!! まっつつつつつつつつつつつつ
つつつつつつつつつつたふ解読できないよ!」

源の「会長うつせえぞ」の声も逆に「うるさい！」の一喝で黙らせてしまうほどに突っ込み続ける杉崎優香会長。

「やだなア。フランス語ですヨオ」

笑顔のリオ。

リオ・シェントウルクは【フランス・イギリス・トルコ・日本】

のクォーターの血が流れる高校2年生女子である。

「リオはアホだからな。諦める会長」

後ろのソファーに座りながら書類関係を整理している源達也が會長をなだめる。

「Vous ? t e s l e s p l u s s t u p i d e s d u m o n d e」

「は？ なんて？」

「なんでもないです」

リオはフランス語で源達也に牽制球を投げる。

「なんかイラッとするな。さっきのはどーいう意味だ？ リオ」

「『タツヤさんはとても賢いので勝てません』」

「絶対嘘だろ！」

ちなみに意味は「あなたは世界で最も馬鹿ですけどね」である。

リオは源達也の投げる紙くずをサツと避けてニヤニヤする。その態度に余計にイラッとする源であるが、こんなことは日常茶飯事なので杉崎優香も別に全く気に留めていたりはない。

紙くず攻撃から逃げ回るリオ。だがそれは突然開かれた扉によって無残にも押しつぶされることとなる。「へぶうつっ！！」という、西欧系の美少女が決して出していけないような声を上げて壁に叩きつけられた。

「たのもー！！」

犯人は雪城鈴である。

「こら鈴！ いきなりノックもなしに扉を開けるな！ 失礼だし危ないだろ！」

「そっか、ごめん。でも幸い誰も被害には——」

扉が反動でもどつてくる。

そして、ふらついているリオと目が合う。

「——あつてないみたいだし」

「あつてるヨ——ッ！！ 超あつてるヨ——ッ！
？」

金髪に碧眼の、まさに絵に描いたような西欧の顔立ちの美少女が鈴を捲し立てる。

「ていうかさつき目合ったよネ!? 合ったよネ!?」

「……イツキ」。この子怖いんだけど……」

鈴は困ったような顔。自分のせいだという意識はないようだ。

「あ、神村。なんだ、この子の使用人力?」

「違うわ。なんでそうなんなんだよ」

イツキとリオには面識がある。二人は学年が一緒なのでそれは言うまでもない。だが鈴はまだ転校してから少ししか経っていないのでリオのことを知らなかったようだ。ちなみにイツキが意味もなく付いてきたのは鈴が心配だったからである。

「騒々しいわね。何か用かしら? 雪城さん」

ソファーに座る源達也の右隣に立っていた杉崎優香が鶴の一声で本題に進めるべく帆を張り指針を立てる。

「杉崎優香さんはいますか?」

鈴の表情は真剣なものに変わる。

「私だけど」

鈴の目に何か感じたものがあつたのか、杉崎優香の眼光も生徒会長のあるべきそれに打って変わっていた。

「友一の件で話があります」

鈴の「友一」という発言に、優香は心のなかで「へえ」と思った。「友一が何かした?」

「いえ、何かしたのはあなたの方ですよ」

鈴の語調が少しだけ強いような気がする。

イツキはその硬直気味な雰囲気緩和させようと、話に割って入ろうとしたが、鈴に右手で進路を阻まれて介入することは叶わなかった。

「……何か知らないけれど、話は放課後にしましょうか。場所は2年1組の教室でいいわね?」

2年1組は鈴とイツキのクラス。杉崎優香にとって生徒の把握は

お手の物だ。

「……なんだあ？　なんか面白そうなことになりそうだなあ？」

「タツヤさんは元から面白いナリで羨ましいですヨ」

「リオ、てめえ絶対俺のこと先輩だと思ってないだろ……」

シルビア・”リオ”・シェントウルク　高校2年生。

源達也　高校3年生。

彼とリオのこんなやり取りは本当に日常茶飯事である。

イツキはその様子を見て、「先輩も苦労してるんだなあ……」と
源達也に共同意識のようなものを感じた。

生徒会役員達（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

応援なんて、していないわ

薄茶色のロングヘアに凜々しい雰囲気を持ち、制服を校則の規定通りにきちんと着こなす杉崎優香。放課後の2年1組の教室にいる彼女は、対面する鈴・イツキと行儀よく向かい合っている。細かい所で血筋は争えないものだ。

「さあそろそろ始めようぜ会長！ 話し合いつてやつをな！」

「さつさと始めなさいよネ！」

彼女の後ろの二人が賑やかである。それもどこかで聞いたことのあるようなセリフ。杉崎優香はその存在に気付きながらも完全無視を決め込んでいるのか、彼らには一切触れない。イツキは少しだけ不憫に思ったが全く堪えることなく勝手に二人で楽しんでいるようなので、「まあいいか」と思い彼もスルーする。

「それで、雪城さん。友一のことで話したいことがあるってことなんだけど、何かしら？」

空席がたくさんあるにも関わらず、誰も座らない。

「取り消して下さい」

「取り消す？ 何を？」

杉崎優香は片手を腰に当てながら鈴に質問返しをした。

「『試合で活躍できないんだったら出るだけムダだから、辞めなさい』。このセリフに聞き覚えはないですか？」

「知ってるわよ。私が友一に言った言葉なんだから。それがどうかしたの？ もしかして、この言葉を取り消せって言っているの？」

「そうです。こんなの必死に上手くなるうとしている人間に対して言う言葉じゃないです。ましてや姉のあなたが実の弟にそんな突き放すようなことを言つて、どういふつもりですか？」

鈴は言う時はハッキリと意見を述べる主義なようだ。イツキも鈴の斜め後ろで気が気でない様子。

「……。どういふつもりも何も、その通りなんだから仕方ないじゃ

ない」

杉崎優香は鈴の言葉に一拍置いて話しだす。

「努力しても報われない人って、いるでしょう？ 変なことを言うようだけど、残念ながら『神』ってのは人を平等には作ってくれないのよね。元から頭がいい人もいれば、心配になるくらいに悪い人もいる。どれだけ練習してもプロになれない人もいる反面で、才能だけでプロになってしまう人もいる。——努力したらした分だけ脚光を浴びられる人もいれば、そうでない人もいる。仕方ないのよ。友一はそっちの人だったってだけのこと」

いつの間にか後ろで遊んでいたリオと源も話を聞いていた。

「なんでそんな切り捨てるようなこと平気で言えるんですか！ それに、友一はあなたの期待に応えたいって言っていたんですよ！？ 応援してやろうとか、そんな気持ちはないんですか！？」

鈴が食ってかかる。

必死に訴えるその目は真剣そのものだった。

イツキも鈴のこんな目は初めて見る。

それほどにまで彼女は必死だったのだ。

「……」

杉崎優香は下を向いて視線を逸らし、長い髪を片手で遊ばせる。

「応援なんて、していないわ」

そう言う彼女は「用件はこれだけね？」と後ろを向き、さっさと帰ってしまった。

鈴は悶々としていた。

「ゆきしろ先輩、かみむら先輩。できるようになりました」

小さい少年がボールを両手で抱えてタタッと駆けてくる。

杉崎友一だ。

「お、できたか！　じゃ一回試してみつか！　鈴、見ていて——」

何かを考えているのだろうか、二人の話は彼女の耳には入ってきていないみたいだ。イツキは肩を叩いて、もう一度名を呼ぶ。

「へ？　あ……。うん？」

「『うん？』じゃなくて！　友一ができたって言ってるぞ！」

「あ、できたの？　じゃ、やってみよっか！」

友一は鈴に「はい」と礼儀正しく返事をする。彼の礼儀正しさは本当に折り紙つきだ。放課後の練習を開始してもう2週間と少しになるのだが、その礼儀正しさは一向に陰りを見せない。

この練習にはイツキも参加している。イツキは特にサッカーは上手というわけではないのだが、友一にプレスをかけてディフェンスの練習などでは巧拙に関係が無いので彼も協力ができるのである。

「じゃ、行くぞ！」

イツキは友一に向かってボールを奪取せんと走りだす。友一はイツキのプレスに簡単に潰されてしまい、その技を出すまでもなくボールを奪われてしまった。

「……かみむら先輩、もう一度お願いします」

友一は『もう一度』というが、実際はもうかれこれ何十回やったか分からないほどだ。

「やっぱり体格差で不利になるよなあ……」

友一は小柄だ。辺りの激しいサッカーではフィジカル面において不利な局面が多くなってしまう。

「大丈夫です。体格差なんて、言い訳です。私が倒れたのが悪いのです」

友一は顔についた土を払って再戦を促す。

鈴がその光景を考え事をしながら見つめていると、背後から「ウツヒョーイ！」という声と共に誰かに抱きつかれた。

「わわ!？」

驚く鈴が振り返ると、知っている顔が悪戯な笑顔を浮かべていた。

「鈴! 久しぶりだな!」

リオだった。鈴は「久しぶりじゃないよ?」と言いながら、彼女の抱きつく手を掻い潜る。あの日以来よく話す仲となったりリオと鈴はクラスは違うのだがほとんど毎日顔を会わしている。鈴の言うとおり、久しぶりではない。

「よう」

イツキも後ろから声をかけられる。同時に頭の上にポンと書類らしきものを置かれる。

「な、なに?」

バランスを崩して落としそうになるも、すかさず両手でキャッチし落下を免れた。

「はかどつてつか?」

「源先輩!」

源達也とリオ・シエントウルクの生徒会コンビだ。

「そっちが、杉崎友一か」

源達也とリオは視線を友一に移す。

「はい。初めまして。いつも姉がお世話になっております。杉崎友一と申します。よろしく願います。私のことは「友一」とお呼び下さい」

ペコリと会釈する。相変わらずの礼儀正しさ。

「おー!! すつつつこい礼儀正しイ!! 感動シター!!」

「会長の言ってたとおりだな。すげえ礼儀正しいわ」

感動するリオに、笑顔で友一に応対する源。

「そんでさ、どっち?」

「? どっちとは、何のことでしょうか?」

「性別」

「私は男ですけど?」

友一はぼわぼわとした表情のまま質問に答える。

「ほら言っただじゃねえか」

「ええー！ 些か信じられないヨ……」

「こそこそ話をする二人だが、その気持ちは鈴とイツキもよくわかった。心のなかで激しく相槌を打つ。」

「あの、これは何ですか？」

「イツキは頭の上に乗せられた十数枚にも上る書類を落とさないように持ちなおしながら、源に尋ねる。」

「資料だ。次の対戦高校と、サッカーの技術向上のためのな」

「いやー、疲れたヨオ。相手高校のデータって中々落ちていないもんなんだネー」

「右手で頭を掻くリオ。」

「え！ 何で二人がそんなこと——」

「鈴の肩にポンと手を置き、話を遮るように源は話しだす。」

「——会長は、杉崎優香はウソをついている」

「源とリオを除く3人は「え……」と驚嘆の声を漏らしてしまう。」

「視線を逸らして髪をいじる仕草。ありや、あいつがウソ付いてる時の癖なんだよ」

「いつも一緒にいたらわかるよネ！」

「そうなの？」

「はい、確かにそうです。姉は隠し事をするときなど、よくその仕草をします」

「杉崎優香はあの時、教室で確かにその仕草をしていた。」

「そしてその後彼女が紡いだ言葉は——。」

「つまり、そーいうことだ。会長は首に縄つけてでも引っ張ってきてやつから、試合、死ぬ気で頑張れよ。死なねえから」

「今の言葉、録音したカラ後で会長に聞かせよう！」

リオの手には携帯電話もといスマートフォン。もちろん録音機能だっつついている。

「おいイイツ！ 何でピンポイントで『会長は首に縄つけてでも引っ張って』のとこだけ録音できてるんだよオ！！」

雫がひとつ、地面に落ちた。

滲んで円形のシミができる。

それは杉崎友一の頬を伝う一筋の涙だった。

「ありがとうございます……ありがとうございます……ッ！！ わた、私は……
……とんでもない幸せものです……！ 私なんかのためにこんなに協力していただいて、本当に感謝の気持ちでいっぱいです……！！」

涙を袖で拭い、彼らの方をしっかりとした目で見る。その目は何かを見定めたような、希望に満ちた目だった。

「次の試合、もし出ることができたら……できたら、皆さんに教わったことを全て発揮できるように全身全霊を持ってプレーします！ ですの——」

友一の手をぎゅっと強く握る。

鈴だ。

「皆で絶対に見に行く。もちろん、お姉さんも連れて、ね」

とても優しい表情だった。

鈴は時々天使になる。

応援なんて、していないわ（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

杉崎姉弟編、次話完結です。

輝く場所

今日はとても天気がいい。

休日の日曜日ということもあり、市営球技場の周りの公園には家族連れで子供と遊ぶ姿が見られる。

鈴も絶好の試合日和にゴキゲンな様子。もちろんイツキも同伴する。最初のうちはただの保護者のつもりだったのだが、今のところはどのような心境なのだろうか。

「さーいよいよだねー！」

帽子とワンピース姿のリオ。白亜の城のお嬢様を彷彿とさせるような、いつもの制服姿とはまた違った印象を与えられる。

「ああ、楽しみだ」

源達也も今日の試合を楽しみにしているようだ。半袖にジーンズが中々に似合っている。

「……私はいって言ったのに……」

リオに手を引かれながら、後方から渋々と付いてくるのは杉崎優香。無理やり連れ出された感が否めない。だが今回の試合は、この杉崎優香が見に来ないと意味が無い。それを十分に承知している皆は一致団結して杉崎優香を連れ出したのだ。

「そんなこと言わずに、来てくださいよ。鈴も頑張つて友一と練習していたんだし、きつと期待に込めてくれると思いますよ」

「だあーから、そんなんじゃないって」

イツキの後押しにも、杉崎優香は「全然分かってないんだから」とでも言いたげな表情を浮かべる。そんな態度をとる杉崎優香にイツキは苦笑いを浮かべてしまうが、鈴とリオ、源は「知った事ではない」というような感じで彼女の手を引きそそくさと球技場の中に入ってしまった。

球技場の門をくぐり、少しだけ薄暗いスタジアムの客用廊下を渡

る。こんなところイツキも初めて訪れたので観光客のようにキヨロキヨロ辺りを見回してしまう。対する鈴は特にはしゃぐ様子もなく、少し緊張した面持ちのように見える。チケットに記載された入場ゲートを見つけて、その柔らかな光の漏れる方へと足を進める一行。

「うわあ……」

5人から思わず感嘆の声が漏れた。

目の前に広がる広大なピッチ。

試合開始を今か今かと待ちわびる観客たち。

応援団の応援合戦。

独特の青臭い芝の匂い。

テレビでしか見たことのないような巨大電光掲示板。

その全てが、今から始まる試合をより神聖なものに仕上げ、選手の意気を鼓舞する。

この光景は杉崎優香の胸にも響くものであった。心のなかで「こんな大舞台で、あの友一が……」と小さく呟く。

5人が席を探し、まとまって座ると会場アナウンスのコールが流れた。

「——スターティングメンバーの発表です。ゴールキーパー——」

少しだけ割れ気味の音声だが、そんなことは全く関係なく、選手がひとりひとりコールされる度に大歓声に包まれる。

「——ディフェンダー・杉崎友一くん。背番号5」

このコールに5人はより一層沸き立つ。

「友一！ 友一が呼ばれた！ スタメンだ！」

その中でも人一倍にはしゃぐ杉崎優香。まるでおもちゃを買ってもらった子供のようだ。そんな彼女をニヤニヤしながらじろじろと

見る源とリオ。この視線に気付いた杉崎優香はハツとし、行儀正しく席に座りなおした。

「な、何よ。そりゃ、弟が出るんだから、ちよつとは興味もあるわよ！」

「ほんとに『ちよつと』かあ？」

「何言ってるの、本当に決まってるじゃない。それに出るだけ出ても、試合で活躍できないんだったら迷惑になるだけなんだし」

源は、いつもの『杉崎優香会長』に戻ってしまった彼女に「素直じゃないねえ」と独り言のような小さい声で告げ、ピッチに目を移し戻した。

「なあ鈴、友一ってディフェンダーなんだ？」

「そうだよ。言ってなかったっけ？」

「ああ、思えばポジションなんて聞いてなかったしな。ディフェンスなら、そんな技とかな必要になるのか？」

「そりゃあるに越したことはないよ。特に、友一はね」

選手たちが列をなしてピッチに入場する。その中でもひとときわ背の小さい友一は別の意味で異色であり、目立つ。

ピッチ全体に散らばり、選手が各々のポジションに付く。杉崎友一はピッチの端っこに陣取り、屈伸運動や手足をぶらぶらさせたりしてリラックスしようとしているようだ。

「友一はサイドバックなんだよ」

「サンドバック？」

「やめるオ！ 展開によっちゃ洒落になんねえから、やめるオ！」

「？ リオ、サンドバックって何？」

「ボコボコにされ——」

「——言っちゃだめエ！ 超不吉だから言っちゃダメエエッ！」

リオの言う通りになってしまっただけは、杉崎優香の心は全く動かない。この試合は杉崎友一にとって正念場なのだ。

選手たちは対戦相手と相対し、高らかに吹かれた笛の音と共に試

合が開始された。

「なあ会長」

おもむろに源が話しかける。

「何よ」

「友一のポジションのサイドバックってな、サッカーでは最もしんどいポジションって言われてんだ」

「ふうん」

「なんせ一試合で合計20〜30キロ、場合によっちゃそれ以上の距離を走ることになるんだからな。更に守備でも攻撃でもサイドの切り札となる場所だ。責任もあるし、しんどいし、それなのにあまり脚光を浴びるトコでもない」

杉崎優香は黙って試合を見続けながら、彼の話を聞いている素振りを見せないようにしながら耳を傾ける。

「そんな縁の下の力持ちみたいな、地味だが重要なポジションに、1年生の友一が抜擢されている理由は何だと思うよ？」

「知らないわよ。監督に気に入られてんじゃないの？ あの子、女の子みたいだし」

「ははっ、もしそうだったらそれはそれで問題だな。でも、ただそれだけの理由であいつが選ばれてるって、ホントに思うか？」

「……」

「そんなくだらねえ理由で選手を使う監督なんざいねえって、思わないか？」

チラと杉崎優香の方を見るが、彼女は試合を黙って観戦している。源は口を少しだけ緩ませ、「ふう」と小さく息を吐く。

「最初っから負ける気にいる監督なんざ、絶対にいねえんだよ」

杉崎友一は何度も吹き飛ばされた。

全国大会への第2回戦ということもあり、相手選手も容赦のないチェックだ。しかも友一に体格で大きく勝る3年生の選手が相手と

なつてしまえば、フィジカルの差もあり容易に突破を許してしまう。その様子を、唇を噛み締めながら見守るイツキ。声を上げて応援するリオに、ジェスチャーまで加えてまるで監督かと言わんばかりに大声を張り上げる鈴。スタジアムも大歓声に包まれているままなので彼女たちの声が友一に届いているかどうかは分からないが、それでも必死に応援を続けた。

前半終了。試合は0―0のまま、得点は動かなかった。

前半、友一は何度も突破を許したが、自分を抜いた選手を全力で追いかけてサイドラインを割らせるプレーを幾度となく見せた。サイドラインを割ると相手のスローインからのリスタートとなるので、攻撃を遅らせることができる。友一はそうにしてピンチを防いでいた。

優香は、後半の試合に臨むべくスタジアムに再び姿を現した弟をジッと見つめる。心のなかで彼の名を呼ぶが、聞こえるはずもない。彼女はもどかしかった。

後半のキックオフ。

相手の攻撃は左サイドに集中して行われるようになっていた。

右サイドバックは友一。相手は彼をこのチームの穴だと思い、決壊を図ったのだ。(サッカーはポジションの性質上、右サイドの選手は相手の左サイドの選手と競り合うことになる)そのため、友一は前半よりも格段に走る量が増えた。ピンチになれば体を呈してボールを奪うために尽力し、好機と見るや全速力でサイドを駆け上がる。たとえボールが回ってこなくても、それでも全速力で駆け上がり、全力で攻守に走りまわる。彼はそれを何回も何回も何回も繰り返した。疲れたという表情ひとつ見せずに繰り返した。その様子に少し危険を感じた相手選手は、友一への当たりをもっと激しくする。小

柄な彼はピッチの外にまで弾き飛ばされてしまった。

「あつー！」

5人は同時に声を上げた。

友一は右足を手で押さえながら痛そうにするが、直ぐに立ち上がって「何でもない」といった表情でプレーを再開した。

優香の表情がぴくつと動く。

（もういいよ、友一！ 友一はよく頑張ったよ！ だから、もういいんだよ！）

友一は泥だらけだ。ユニフォームも他の選手とは比にならないほどに汚れている。何度も何度も倒されたので当然だ。それでも彼は必死にボールを追う。

試合はもうロスタイム。

残り僅かとなってしまい、相手も決着をつけようと攻撃に人数を割く。

友一の仕事はディフェンスとオフENSEの両方なので、下がったら下がった分だけ走る量が増すことになる。彼の仕事は増える一方だ。だが、それをも全く苦にする表情も見せずにサイドを走りまわる。

相手のシュートがゴールラインを割り、ゴールキックとなった。

双方疲労困憊。前がかりになった相手の選手たちは自陣に戻るのが遅れる。

「！ー！」

友一は全速力で一気にサイドラインを駆け上がった。

相手選手たちは信じられなかった。80分間（高校のサッカーは前後半40分ルール）全力で走り回っているのに、それでもまだ本気で走れる彼に驚きを隠すことができない。

味方ゴールキーパーはその友一の動きを見逃さなかった。

ボールは一直線に友一の足元にフィードされる。

「通ったア!!」

スタジアムが地鳴りのような大きな歓声に包まれる。

友一は残っていたディフェンスの選手と相對するが、小刻みなステップで華麗に躲して一気にゴールキーパーと一対一の大チャンスを出す。

もう彼の周りには誰もいない。

敵もいなければ、味方さえも追いつけていない。

——もう彼に追いつける者など、誰もいない。

「友一……!!」

優香は手を自らの手をギュウツと強く握る。

杉崎友一は引つ込み思案な少年だった。

自分から意見を言い出す事もできないし、意見が対立するとすぐさま撤回するような、そんな子だった。

それを見かねた姉の優香は、小学3年生の友一に陸上を勧めた。スポーツを通じて、何かの転機にしてほしい、きっかけを掴んでほしいと、そう思ったのだ。友一は姉のその提案に「わかった!」と言い、笑顔で了承した。

友一は走った。

来る日も来る日も、それはもう愚直という言葉がぴったり当てはまるほどに走りこみに精を出した。雨の日も、風の日も、友一は笑顔で「いつてきます」と玄関を飛び出して走りこみをした。

そして6年生になった部活動最後の大舞台、学校単位の対抗でいうマラソン大会。

友一は一度もレギュラーメンバーに選ばれること無く過ごした3年間。やっと掴んだレギュラーが、この最後の大会だった。友一は珍しく、両手を天に翳すほどに、とても喜んでいた。

しかし。

友一はケガをしてしまう。

練習中にしたのではない。

優香を車から庇って、自らが轢かれてしまったのだ。

優香は謝った。心から土下座をしたい気分だった。軽傷とはいえ交通事故に巻き込まれてしまった友一が後2日に控えたマラソン大会に参加できるはずがない。優香は人生でこれほど謝ったことがないというくらいに謝った。彼の努力を知っている彼女には耐えられなかった。どんな時だって希望を捨てずに努力してきたその結晶を一瞬で塵にしてしまった責任。彼女の自責の念はつのるばかり。だが友一は――。

「大丈夫。中学に行っても、頑張るから。姉さんの期待に、応援に絶対に応えてみせるから。だから泣かないで？」

友一は優香を全く恨んでいなかった。

それどころか、このような事態になっても、『姉の期待に応えたいから』と、頑張ると、そう言うてくれたのだ。

その言葉通り、中学に進学した友一は陸上部に入った。

また一からのスタート。小学校の時よりも格段にレベルの高くなった中学陸上は、全く彼にチャンスがなかったに等しかった。

「ねえ、友一。陸上は楽しい？」

「はい。姉さんが応援してくれているので、楽しいです」

友一の答えは決まってそうだった。

姉が――杉崎優香が自分を応援してくれているから、自分は頑張

れる、と。彼はいつもそう答えるのだった。

3年間ずっと補欠生活を続けていた友一だが、今度は短距離の選手として中学生生活最後の大会のランナーに抜擢された。かれこれ小中合わせて6年間も走り続けた彼の脚力は確実に強化されていたのだ。その報告を嬉しそうにする友一。優香は彼の笑顔を見ることができて本当に良かったと思った。

「友一、私のことは大丈夫だから。行つてきなさい」

その日も優香の高熱は引かなかった。かれこれ3日も続いている。両親は共働きなので家にいることはできない。友一が大会に出かけてしまうと、優香ひとりが家に取り残されてしまうことになる。

「でも……」

「『でも』じゃない！ 私は全然平気だから！ だから、精一杯頑張つてくるんだよ！」

足取りもおぼつかないまま寝間着の格好で玄関まで見送りをし、気丈に振る舞う優香。

「……はい。行つてきます」

友一は後ろめたそうだった。

彼が出かけてから約30分後。

ガチャリと玄関のドアが開く音がした。

「……！ ゆ、友一！ あんたどうしたの！」

「ただいま」

「大会は！？」

「雨で中止になってしまいました」

友一は「仕方ない」というような笑顔で優香に接する。

「姉さん、氷枕持ってくるよ」

そう言つと台所の方へ駆けてゆく。

優香の目は涙で一杯になっていた。

「雨なんて……降ってないじゃない……！」

その後、高校に進学した友一は優香にサッカーを勧められる。陸上の知識が活きるかもしれない、ということだった。実際は、もう陸上で希望を破り捨てられてしまう彼を見なくなかった彼女のワガママだった。いっそのこと、『もう部活はしない』と言ってくれたほうがどんなに楽かと思うことさえあった。どれだけ努力しても『私』に妨害されて夢を潰してしまう。サッカー部に入っても、もしかしたら同じようなことをしてしまうかもしれない。おかしい考え方だと優香自身も思っても、過去の事実が否定する言葉を紡がせてはくれなかった。だからこそ『サッカーを辞めなさい』という発言。自分が薦めておいて何だという心もちろんある。完全に自己矛盾しているけれど、彼女は仕方なかったのだ。クラブ活動で努力が報われる友一も見たいが、それよりも理不尽な理由で夢を潰される友一は見るに耐えることができない、ということだった。

「夢を見させるようなこと、私がさせなければ——」
「私が応援なんてしなれば——」

「よく見てろよ、杉崎優香。お前の弟は知らねえ内に、あんなにも大きくなっただんだ」

源は語る。

「意地、張ってんじゃねえぞ」

その言葉に、優香はギリッと歯を強く噛む。

そして、急に立ち上がる。

友一の目の前の敵はもうゴールキーパーひとり。

「いけえええ

——！！ ゆういちい

——！！ 頑

張れエエエエ

——！！」

もう二度と応援してはいけなないと心に決めていた。

応援すると、友一が頑張るから。必死になって努力をするから。

杉崎優香を、大好きな姉を喜ばせたくって、死ぬ気で努力をするから。

友一はその努力をするたびに、結局は報われずに終わってしまう。そんな弟を見るのが何よりも辛かったから。

だから、期待をしなければ、応援をしなければ、友一はもう二度と絶望を味わうこともない。

そう思っていた。

だが今はどうだろう。

ピッチの上に立つのは、もうあの頃の、彼女が知っている『気弱な弟』ではなかった。

「友一は周りのチームメイトに比べりゃ、確かにお世辞にも上手い

とは言えねえ。でも、毎試合スタメンでピッチに立っている。監督に信頼されて、試合に出場している。なんですか？——それはなあ、友一のバケモンじみたスタミナだよ。6年間、走りに走って鍛えた底なしのスタミナ。それに加えて一朝一夕では絶対に身につかない脚力。サイドバックはまさに友一にぴったりのポジションだったんだ。あそこそが、友一が一番『輝く場所』だったってことだ。お手柄だな、会長。友一はもう、大丈夫だ。絶対に……！」

友一は思い切り右足を振り抜いた。

ボールはゴールキーパーが一步も動けないほどの速度で、ゴール左に弾丸のように突き刺さった。

地響きのような大歓声。

チームメイトにもみくちゃにされる小さな友一。

友一はその輪から抜け出し、5人のあるスタンドの手前までやってきて深く一礼を済まし、ピッチへと戻っていった。その瞬間に試合終了を告げる笛。

1―0で勝利。

杉崎友一はその日、人生で初めてヒーローになった。

輝く場所（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

杉崎姉弟編、無事完結！

今回は少し長めになってしまいました。

夏の匂い

「——それでさあ、私も言っちゃったんだよ！『流石にそれは違うんじゃない？』って！そしたらイツキなんて言っただと思う？」

鈴は居間にある電話で誰かと談笑している。

イツキは電話をする鈴を心配そうな視線で見つめる。

「そりゃ私も悪かったと思うけど！思うけど！もうちょっと、何て言うんだろうなあ、遠まわしな言い方？いや、オブラートに包んだような言い方って言うかな、そんな風に加減して言うてくれてもいいじゃん！って！」

会話が弾んでいるようだ。

それは咎めるべきことではないのだが、しかしながらイツキは気になる。気になりすぎて水の入っていないコップを持って飲む仕草を何度も繰り返してしまう。電話を取り上げるのも変だ。相手に不自然過ぎる。

イツキは電話がかかってきた瞬間、奪取することに失敗してしまったのだ。この家にあるのは携帯電話と家の据え置き電話。神村イツキの家にある電話に鈴が出てはマズいのだ。同居がバレしてしまう。イツキの友人は彼の携帯電話で連絡をとるのでその可能性は低いのであるが、やはり憂慮すべき事項ということに変わりはない。イツキは心配で気が気でない。

「え？あ、うん分かった。じゃ、またね！」

鈴は受話器を置く。

「なあ、誰だったんだ？」

「うん？」

「さっきの電話。誰？」

「第六生命のカトウさん」

「誰だよツッ！！ カトウさんって誰だよツッ！！ ていうか第六生命て！！ セールスじゃねえか！ 何仕事の中の人捕まえて談笑してるんだよ！？ 迷惑だろ！」

「えー、だってカトウさん、ちょっとでいいから話聞いてくれって言うんだもん。生命保険がどうたらこうたらとか言ってたけど、訳分かんなかったからこっちのペースに引き込んでやった！」

「引きこむなつての！ 営業妨害！」と表は注意しつつも、もしかしたらこの一件でブラックリストに載って、もう掛かってこないかもしれないなとイツキは少し思った。もしそうなれば友一の件以来の鈴のお手柄だ。

「それではここで問題です！」

「え？」

「第六生命といえは！ なんでしょう？」

突然思いついたかのように、突拍子も無いクイズをいきなり鈴に投げつけられる。

「……………カトウさん？」

「誰だよツッ！！」

先刻のイツキの真似をする鈴。

「こっちのセリフだよおお！ カトウさんってマジで誰なんだよ！？」

「違います。カトウさんじゃありません。さて、何でしょう？ 第六生命といえはなんででしょう？」

神村家は第六生命に何の縁もない。家族がその保険に入っているわけでもないし、父親が職員ということでもない。というか、そもそもそんなこと鈴が知るわけもない。

「えー……………分からないな……………」

「ふふーん」

「答えは？」

「今日は6月1日だよイツキ！！ 第六生命だけに！」

イツキは「ああ」と、忘れていたようであった。

鈴はイツキから1ヶ月に一度お小遣いをもらっている。金額は1万円。イツキにとっては痛い出費であったが、年頃の、しかも同い年の女の子がお小遣いもないなんて可哀想だと思ったのだ。そういった理由で鈴にはお小遣いを上げる制度が確立している。

戸棚から一万円札を取り出し鈴に渡す。

「はい、一万円」

「ありがとう！ 大切に使うからね！」

鈴はお小遣いを貰うと決まってそう言う。

次の日、鈴は学校帰りに服を買ってきた。

お小遣いを貰うと、鈴は必ず服を買に行くのだ。

今回のお買い物はスラッシュキヤミワンピースとミニスカートの二点。鈴なりに夏を意識したのだろうか。鈴は早速試着大会を始める。

「見て見て！ どう？ 似合ってる？」

「うん、似合ってる」

鈴は可愛いので、よっぽどの変な服ではない限り似合ってしまう。

「でも、これで一万円もすんの？ 女の子の服って高いんだなあ」

「いや？ そんなにしないよ？ これでだいたい4500円くらい」

「それは逆に安すぎないか」

「セールの時を把握しているからね！」

鈴の経済観は中々に逞しいようだ。

「じゃ、残りのお金は？」

「貯金してるんだ。半分くらい使って、後は貯金」

「おお……」

「どしたの？」

「いや、すつげえ感心した。記憶さえ取り戻したら、鈴はいいお嫁さんになるよ」

「……誰の？」

鈴はイタズラな笑顔でイツキに問う。

「えっ！？ あ、ソナ、そんなんは分からないけど、その将来的な――」

気がつくとも鈴は目の前から消えていた。辺りを見回すと、買ってきた服を丁寧にたたんで洋服ダンスにしまっていた。イツキは鈴に踊らされて気恥ずかしくなる。イツキがいちいち焦ってしまうのは、鈴がしばしばこのような思わせぶりな際どい発言や行動をするからだ。例えば、鈴はお風呂上りも案外に無防備だ。バスタオル一枚で出てきたり、風呂の扉から顔を出すときなんて確実に全裸だ。顔しか出さないのも全身が見える訳ではないのだが、男子高校生と同居中という身でありながらその行動の数々は相当危険に思われる。また、最近は段々と暑くなってきたこともあり、寝るときなんて大胆にもシャツ一枚とブラブラのズボンなので、頑張ったら見えそうなくらいだ。鈴がただ無頓着で無防備なだけなのか、イツキを信頼していることなのか、その真偽は定かではない。

「まあ、私だって華のJKだからね！ 雑費も色々あるワケよ！」

鈴がいきなり「JK」などというと些か不自然に思うのは何故だろうか。英語6点の彼女がアルファベットを発することにどこか違和感を覚えているだけだろうか。

「雑費って？ 他に何かあるのか？」

「うーん、遊んだりとか」

「遊ぶって、千秋とかか？」

「うん。今度遊ぼって誘われた」

千秋と遊ぶのならば、イツキがついていく必要性はない。男ではないのでイツキも安心できる。

「そうか。じゃあ行つといで」と了承する。

「イツキは来ないの？」

「女子同士でしか話せないことってのもあるんだろ。俺はやめとくよ。千秋が付いてるんなら大丈夫だと思うけど、あいつの前で変な

ことするんじゃないぞ？ 結構察しがいい奴だから、記憶喪失のこともバレるかもしれないしな。そうだったら大変だ」

「失礼な！ 変なことなんてしないよ！」

鈴は口を尖らせて抗議に打って出る。

「いや、分かんねえ。例えば、エスカレーターに乗れずに立ち往生するとか」

「そ、そ、そ、そんなことするワケないじゃないデスカー！」

静かに視線をそらす鈴。

「……」

既にやらかした後でした。

夏の匂い（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

都会へ行ってみる

夏の足音が近づく6月初旬。

制服も夏服へと衣替えが行われ、気分はすっかり夏模様だ。

街行く人々も半袖が目立つ。

サラリーマンは背広を片手にかけてハンカチで汗を拭きながら勤しむ姿が多く見られる。

千秋は既に到着していた。

バスターミナル駅の横にあるコンビニのそばが待ち合わせ場所。

千秋は辺りをキョロキョロと見回しながら、いつ鈴が来るのかと心待ちにする。

鳴り止まぬセミの声が千秋の耳に飛び込んでくる。そのたびに彼女は夏の風物詩を感じ、同時に時の流れが年々加速しているような気がして少しだけ焦りを感じてしまう。

「千秋——」と遠くの方から呼ぶ声。千秋はその声に振り向き、手を振る。声の主はもちろん雪城鈴。だいたい待ち合わせ時間ぴったりだ。

「ごめーん！ 待った？」

鈴の両手は何故か閉じられたまま。両の掌に何かを包みこむような格好。

「……」

中からけたたましい音。ラジオのチューニングを思い切りミスったような、テレビの砂嵐のような騒音。千秋がとても聞き覚えのある鳴き声だ。

「セミ捕まえ——」

「——逃がしなさい——」

解放された手から飛び出したセミは騒音を巻き散らしながら空高く飛んでいった。

「なんでセミなんて捕まえてくるのよ!？」

「道に落ちてたの。何かレアだなんて思ってた」

セミはたまに道を歩いている時がある。あれは何なのだろうか。

「だからって拾ってこないでよ……」

「うん。今度はカマキリみたいな、もっとカッコイイやつを——」

「一緒だよ!！」

千秋と鈴は早速電車に乗って市街中心地に出向く。

ここから市街地までは電車に乗ればだいたい10分となく着くので、割りとリーズナブルな場所だ。巨大なデパートや飲食街、おしやれなデートスポットや、運動や散歩に快適な公園、映画館、電気製品を取り扱う店、そこに行けば必要なものは全て兼ね備えてある。彼女たちが今から向かう所はそんな魅力満載の場所だった。

だがその序盤。

鈴はただただ立ち尽くす。

目の前にはあまり見たことのない機械。ボタンがたくさんついている。いつもの鈴ならばイツキに助けを求めて難を逃れるところなのであるが、その頼みの綱のイツキはいない。そうこうしているうちに、千秋は隣の券売機でさっさと券を買ってしまった。ひとり取り残される鈴。千秋もまさか鈴が券売機から券を買う方法を知らないなどとは思ひもしないだろう。ここで「買い方がわからない」と素直に言うのは少しまずい。千秋からしてみれば鈴は「記憶喪失になっっていない、至って普通の女の子」なのであるから、そのイメージはどうしても維持していたものである。だから、券売機から券を買うことができませんでした等という失態を晒すことは、どうしても避けたい。

鈴は覚悟を決めて券売機と真正面から向かい合う。

たくさん並ぶボタンを、とりあえず押してみる。

「……」

何も起こらなかった。

次にお金を入れてみる。

表示にランプが点灯した。140円と書いてある。市街地までは210円。足りない。

「足りないなあ」

口には出さず心のなかで思うに留めておいた。鈴の周りは人がたくさんいるので、その中で独り言を言うとか変な人に思われてしまう。少し学習した。

続いて10円を投入すると210円のボタンが点灯した。鈴は「やった」と思いボタンをタッチしようとするが。

「……！ 待てよ、これはまだ何かあるかもしれない……。例えばこのボタンを押したらお金が返ってきてちやうとか、駅員さんが出てきてしまふとか、はたまた表示が消えてしまふとか……！ いやいや、そんなことつてある？ でもなあ、記憶ないしなあ……。自信がないなあ……。いつも正解だと思ってする行動が間違いだし、もしかしたら今回も……」

ほんの短い間にこれほどの思考を巡らせるほどに悩む。鈴だつて変な行動を起こしたくないのだ。セミを持ってきたりもするが、それが変なことだとは思わずにしたことなのだ。

そこで、鈴はある妙案を思いつく。

鈴は少し背伸びをし、体を正面に向けながら目線だけを隣に移す。カンニングだ。

覗かれている隣のお爺ちゃんは流石にその目線に気付き、たじろぐ。しかし鈴も容赦はしない。お爺ちゃんのふるふる震える指が値段表示の光るボタンを押したのをしかと確認すると、鈴もすかさず210円のボタンを押した。

「ありがとうございます」という音声案内に少し驚きながら、無事券売機下部から出てきた切符を受け取り、待っていた千秋の方へ駆けてゆく。

「時間かかってたみたいだけど、どしたの？」

「い、いやー、ちょっと」

「あ、お札が中々入らなかったとか？ たまにあるよね、それ。自動販売機とかで何回もなっちゃうと鬱陶しいよねー」

「え？」

「何回も出し入れしないといけないし面倒臭いから、ああなると買うのやめちゃいそうになっちゃうよ」

鈴にはそんな経験がない。そもそも、自動販売機なるものを使った記憶がない。なので、千秋の言う「お札を出し入れしないといけない」の意味がよくわからない。そんな現象に出くわしたことはない。

「あ、ああ。バラバラになっちゃうやつ？」

「ならないよ！ お札がバラバラとか激怒だよ！？」

鈴の頭にはシュレッダーが浮かんでいた。

鈴は改札でも少し焦っていたが、運良く先に通過してくれた千秋に倣って通過することができた。電車は遠くから見ているので知っていたものの、電車に乗るまでの一連の動作は彼女の一掃された記憶の中には存在しなかったので仕方ない。母親と一緒に電車に乗っていた幼少期、いきなり「ひとりで電車に乗りなさい」と言われて慌てること無く迅速にできるかと尋ねられてその通りに実行できる人が何人いるだろうか。鈴の状況はまさにそれと酷似している。更にいつもそのお母さん役をしてくれていた神村イツキが今日はいない。また記憶喪失だということは明かしてはならないことであるので、何でもかんでも千秋に尋ねるのはできるだけ避けたい。つまり、鈴は分からないことがあっても聞けないという状況に投げ出されてしまったのだ。心のなかでイツキに助けを求めても届くはずもない。今の鈴は保護者のいない無知な子供同然の状態なのだ。鈴もさすがに「これはヤバイ」と思い始めるも時既に遅し。

自分が放り出された状況に少し血の気の引く危機感を覚えながら、

電車のドアが閉まり鈴達を乗せて都会へと連れて行く。

都会へ行ってみる（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

骸骨のプレッシャー

鈴の脳内には童謡「ドナドナ」が流れていた。

鈴を運ぶ電車はまさに動く監獄であり、密室そのものだった。逃れる術は途中駅で逃亡するくらい。だが、そんなこと出来るはずがない。千秋に物凄く不審がられて終了だ。今回はできるだけミスを少なくこのお出かけミッションを完遂しなければならない。そしてせつかく千秋に誘ってもらったのだから、鈴なりにも楽しまないと損だし、何より誘ってくれた千秋に悪い。

まさに二律背反。

電車は目的地へとたどり着く。

思索を巡らせる鈴は、「行こっ」という千秋に連れられて電車を降りる。電車内では千秋と会話していたものの、この場をどのように切り抜けるか、どのような行動をすれば最善なのか——このことで頭がいっぱいだったのだ。

最初の関門、改札機は乗るときのおさらいで上手く切り抜ける。少しか身構える鈴は周りから見るとオーバーアクションのように映ったかもしれないが、それでも真剣なのだ。子供に指を差されていたなんて絶対に千秋の気のせいだ。

「ね、どこ行こっか？」

千秋は鈴の顔を覗き込む。

「え！ あ、そうだなあ……。千秋の行きたいトコに行こうよ！」

鈴のパーフェクト回避。このセリフは電車内で思いついた最良の回避方法だ。自分の不審さを全く表にも出さずに、しかも自然なフリで次の行動にうつすことができる。まさに死角無しだ。

「いいの？ じゃあ、服とか見たいし、あっちに行こう！」

千秋が指差した方向には若者の群れ。鈴はこんな光景初めて見た。内心驚くが、表情には全く出さない。出さないようにしているのだ。

が、やはり完璧に行くことはできない。実はその機微な変化を既に気付かれていて、千秋に「面白いなあ」と思われていることなんて鈴が知る由もない。

「あっちつて、何があるの？」

「服屋さんとかがたくさんある通りだよ。行ったことない？ それだったら、色々見てみなよ！　たくさんあるから、鈴も欲しい物が見つかるんじゃない？」

「へええ……そうなんだ！」

千秋の言葉に鈴の目が輝く。

鈴も記憶喪失という点を除けば何ら変わりないひとりの女子高生。流行りの服やカバンやアクセサリーだって欲しい。鈴はよけていた分のお金を持ってきているので、お買い物準備はバッチリだ。

「じゃあ早く行こう！」と千秋の手を引っ張り、その人集りの中へ突進していく。

鈴は服屋がたくさんある場所というのも初めてなのだが、同世代くらいの人たちが一斉に集まる場所というのも初めての経験だ。いつもは商店街の通りでお買い物をしているので、その差に呆氣に取られてしまいそうだ。

千秋は「ここに入ろう」と鈴を誘導する。割りと広めのお店だ。天井には空調を管理するためのシーリングファン（ベンチレーター）がくるくると回っている。思わず天井に気を取られてしまう。

「……飛ぶのかなあ」

「？」

独り言のような鈴の声が聞こえたが、千秋には何のことか分からなかった。

店内にはまた多くの若者達であふれていた。外の通りよりはずつとマシだが、それでも中々に多い。休日の昼日中となれば、これは不可避なことだ。

鈴は服を手にとって、「うゝん」と渋い顔をする。

「なんだかなあ。骸骨つてなあ」

髑髏がプリントされたＴシャツを手にながら、眉にシワを寄せ
ている。すると――

「どうなさいました？」

笑顔で店員さんがやってきた。

「いえ、この辺りの服は私には似合わないなあって思いまして……」
余談だが、鈴はきちんと敬語を使える。

「ああ、やはり男物の服ですと、女性の方には似合わないかもしれ
ないですねえ」

「えっ、あつ、そ、そうですねえ！ 女性物の方も探してみま
すう！」

鈴は恥ずかしくなつてそそくさと逃げ出すようにその場を後にし
た。そして、洋服を見定めている千秋の元へとヘルプを求めに行く。

「鈴？ どしたの？」

「骸骨が私にプレッシャーをかけてきたんだ。大変だったよ」

「……そう」

些か意味が分からなかったが、千秋はいつものように笑顔で対応
する。ちなみに千秋的には鈴の独特の言い回しは可愛いと思ってい
るのでプラスポイントだったりする。

鈴は変な箱を見つける。

「……？」

カーテンが閉まっており、靴が置いてある。
試着室だ。

鈴がいつも行く服屋はとても小さいので、試着室なるものが置い
ていない。せいぜい姿見で精一杯だ。

「私、あそこに行ってくる！」と千秋に告げ、ワクワクしながら突
貫する。

鈴は空室を見つけて、その中に入る前にひとまず周りを確認する。
この箱の存在理由を確かめるためだ。鈴は少しずつ学習している。

そして「服を持ってカーテンを閉めて……。そうか、一度試しで着ることができるのか!」と悟る。

靴を脱いで中に入ると、小さな個室に姿見が設置されている。鈴はビンゴだと確信する。

「ではでは、早速着てみますかね」とゴキゲンな様子であったのだが。

「……………」

鈴の手に握られた服に睨まれる。

「……………」

その骸骨は鈴を睨んで離そうとしない。完全にメンチを切られている。

「違うよッ!!」

手で広げた骸骨Ｔシャツは男物であるので鈴には大きい。

「コレじゃないよッ! 私のブラウスはどこへやった!？」

鈴が選んだブラウスは千秋の横においてあるカゴの中。

「鈴。試着、見せて!」

外から千秋の声。靴で分かったらしい。

「あ、うん、え、ちよっと待って!」

鈴に逃げ場がなくなった。

あんまり着たい服でもないのだが、着られなかったと言い訳してサレンダーしてしまうのは、彼女の乙女としての心を決める何かがある。

意を決してサアツとカーテンを開ける鈴。

「…………… おお……………」

「… 千秋。今日は骸骨のプレッシャーがキツイよ」

鈴はとても不服そうな表情だが、千秋の感想としては「コレもあり」だった。

男物の服からずり下がって見える鎖骨が妙に艶かしい。

「なんかちよつとエロいねえ」

ついつい全身を舐めるように見てしまう。

「そうかなあ？ でもいけないや」

ちなみに鈴にあっさりと却下されたそのシャツはイツキも持っていりする。

骸骨のプレッシャー（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

ショッピングモール探索中

鈴と千秋は服屋を出てショッピングモールへと足を運ぶ。

店内は冷房がよく効いており、自動ドアをくぐった瞬間に彼女たちは清涼な空気に包まれた。同時に香る新築のような匂い。ビオトープには水がさらさらと流れており、小魚たちが涼しそうに泳いでいる。その近くにはエスカレーターがまるでオブジェのようにそびえ立ち、それが幾重にも交差して近未来アートのような美しい風景を創り出している。鈴はこのような現代テクノロジーと自然が見事に融合した光景など見たことがなかった。それはとてもセンサーシヨナルで、感動に値するもので、彼女は思わず感嘆の声を漏らしてしまう。

「とりあえず涼しいところに来てみたものの、次は何をしよう？」

鈴が感激と好奇心で辺りをキョロキョロしている傍で、千秋は次なる行動を思索する。

「何かしたいことある？」と鈴に振ってみるも、当の本人は千秋の傍にはいなかった。「あれ？」と辺りを見回してみると、ビオトープの近くで目を輝かせている彼女がいた。まるで人形売り場に張り付く幼い女の子のようだ。

「鈴？」と呼ぶと、鈴はやっと千秋に気付いた。

「どうしたの？」

「千秋！ これって凄いやねー！」

興奮気味の鈴。千秋は少し驚きながらも「何が凄いの？」と冷静な質問を返す。

「だってだって！ この建物の外観も含めて、エスカレーターから店から何から何まで全てがアートの一部としての有用性を保持しながらも、人が使うという観点もきちんと考えられていて、何も不由なく使うことができるんだよ！ その全てに無駄なものはいっつも見受けられないし、その上に清涼感や清潔感を醸し出す『自然』

を配置する美的センス！ もうこれは一種の造形美だよ！ 凄いよね！！」

千秋が予想だになかった意見が返ってきた。まさかの長文、熱弁に「そうだね」と頷き肯定することしか出来なかった。

「鈴って感受性が強いんだね。そういうことを考えられる人って、素敵だと思うなあ」

「そうかなあ？ 誰だってそう思ってると思うんだけどな！。じゃないと製作者もこんな風なコーディネートにしないだろうし、心のどこかでそう思っているからこそこの作品なんだよ。なんて言うんだろっ、今の人はあまり感動を口にする人が少ないよね。言葉に対する執着がないというか、感じたことを言葉にする語彙力が足りないと言つか。小学生でも英語を習うようになったとか最近聞くけれど、日本語でさえ十分に扱えないのに他国の言語をやっている場合かってちよっと思っちゃう。小学生の時だからこそ母国語を芯から叩きこむべきなのだと思うんだよ」

さらさらと涼しげに流れる水を見ながら、柄にもない発言をする。千秋も思わず真剣に耳を傾けてしまう。

「だから、私の6点も仕方ないのである！」

「せっかくいいこと言ってたのに！ 現実から逃げちゃダメ！ それで話を戻すけどさ、鈴はどこに行きたい？」

「ご飯が食べたい！」

時刻はもう昼過ぎ。

彼女たちのお腹はそろそろ空腹を告げる音が鳴り響きそうな頃合いだ。

「よし！ じゃあご飯にしようか！」

「うん。でもさっき服買ったから、そんなに高いものは食べられないかも……」

「じゃあテキトーにファーストフードにでもしとく？」

「？ うん」

もちろん鈴はファーストフードがいかなるモノであるか知ってい

るわけもない。即ち先ほどの返事は話がうまく繋がるように相槌を打ったに過ぎない。先ほどの高弁とはまるつきり違った態度だ。鈴は記憶を失っているだけであって、思考回路が消滅したわけではない。論理的思考も数学的な考え方もきちんとできる。鈴の言う記憶喪失とは、ものや特定状況に対する概念が挟られているという点におけるものだ。目の前にものが置かれていても、それが何をするためのものか思い出せない。自分が置かれた境地に対して、どのような行動を取れば模範的な『常識の範囲』に収まるのか分からない。

鈴は千秋に連れられて入店する。お昼時の混雑ピークは回避できたが、それでも人はかなり多い。しかし込み具合など、どの店も大差はないので我慢するしかない。

あと少しで自分たちが注文する番。鈴は千秋と談笑しながら列に並んでいた。

だがしかし。

鈴は重要なことを忘れていた。

初めての場所での初めての店。初めての注文スタイル。その上見たことのないメニュー。セットやら何やら書いてあるが、到底鈴の理解に及ばない。事前準備もなしに突貫してしまったことに、今となって焦りだす。「そ、そうだ！ 千秋と同じ物を頼めばいいんだ！ 店員さんに『同じ物を！』って言うだけで済むし、別に変じやないよね！ フッフ、我ながら完璧……」

突如、閉鎖されていたレジの片方に店員さんが寄って行く。

「お次のお客様どうぞー」

「はい」

「ちよつとおおオオオ!?」

千秋は行ってしまった。

鈴より先頭に千秋が並んでいた不運。頼みの綱消失の決定的瞬間だ。コンビニのレジでもたまに起こる現象。鈴は今ばかりはこの幸運を恨む。

「お次のお客様、どうぞ！」

笑顔で応対する店員さん。鈴はつつい引き攣った笑顔で応対してしまう。

「ご注文、お伺いします!」

「えと……」

会計のメニュー表をジッと見る。

「何がなんだかよく分からない」というのが鈴の感想だった。しかしいつまでもメニュー表と睨めっこをしているわけにも行かない。何か行動を起こさないといけない。鈴はとにかく目についた商品を頼む。

「ハ、ハンバー——」

「ハンバーガーがおひとつ!」

「!?!」

おののく鈴に笑顔で注文の続きを待つ店員さん。マスコットの帽子が可愛い。

「……オレンジジュ——」

「バレンシアオレンジジュースがおひとつ!」

「!?!」

再びおののく。

「……以上で」

もう驚きたくない鈴は断念しようとするが、「それでしたら、こちらのAセット、Bセットの方がお安くなっておりますが、宜しいでしょうか?」と親切な追撃をかける。

「え、Aセット?」

「はい。AセットですとポテトのLサイズがついております」

「そ、そんなにポテト要らないです……」

「それでしたら、ポテトのSサイズとナゲットがついてくるBセットはいかがでしょう?」

「二つも……。そんなに要らないです」

「そうですか……」

どことなく二人のテンションが落ちたように見える。

ちなみに鈴は別に要らないわけではない。一刻も早くこの場を切り抜けようとしているだけだったのだ。だが、簡単に計算してみると確かにほぼ同額で二品も多く食べることができるセットは得だ。

「それではハンバーガーとバレンシ——」

「ちょ、ちよつと待ってください！」

鈴はお盆から商品を落とさないように、身長に商品運び千秋の座る相席に行き着く。

「遅かったね？ どしたの？」

「ちよつと手間取っちゃって」

千秋は「ふうん」と言いながらコーラをストローで啜る。

「AセットがどうかBセットがどうか言われて惑わされちゃったよ。あそこは一瞬の決断力が是非を分ける戦場だね」

戦から帰還した兵士のようなセリフに、千秋は「そう」と笑顔で応対する。

鈴の独特な言い回しは、千秋は結構好きなのである。

ショッピングモール探索中（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

「ゲームセンター？」

乙女同士の話は尽きるところを知らない。

放っておけば、或いは時間の制約がなければいつまでだって話していそうな勢いだ。一体どこからそれだけの話題が出るのかと不思議に思えてくることさえあるほどだ。頭の中に最新のニュースが全て詰まっているのかと疑わしくなってくる。

この取り留めのない会話に、千秋は「そろそろ出ない？」と提案を出す。もう来店してから2時間は居座って話している。鈴も快諾したところを見ると、流石に次の行動が取りたくなっただのだろう。

「もう4時もまわっちゃってる！ 気付かなかったけど、結構喋ったんだね。4時も過ぎちゃったし、どうする？ もう帰る？」

「んー。そうだ！ 私、最後にあそこに行ってみたい！」

千秋は鈴の言う「あそこ」に目を向ける。

「ゲーセン？ いいよ！ 行こう！」

鈴は賑やかな所も好きだ。

大きな音とカラフルな色合い、内部には見たことのない機械がたくさん。彼女を引きつけるには十分すぎる要素が満載だった。

「ゲーセンよく行くの？」

「え、いや、そんなに行かないよ」

反応に少し焦る。

鈴はゲーセンになど行ったことはない。もし過去にそこへ行っていたとしても、その記憶が無いので一緒だ。店内に入ると、それは外とはまるで別世界だった。先ほどの服屋とはまるで違う意味での別世界。あまり広いとは言えない店内に大きな機械が何台も連なるように設置されており、そのどれもが鈴をウズウズさせてならないものだった。思わず「わあわあ」といっいち歓声を上げてしまう。

「鈴、子供みたい！」

鈴の反応、毎度とても無邪気だ。その姿を微笑ましく思いながら、

「やっぱり感受性が強いんだなあ」と感心する。しかし真実は鈴が本当に初めての経験なので、その初々しさが千秋には「無邪気さ、感受性の強さ」に変換されているだけである。

「どれにしようかなあ！　どれにしようかなあ！」と店内をくまなく搜索する。千秋は鈴に黙って付いていくことにした。「まるで初めてゲームセンターに来た人みたい」と冗談めかすと、鈴はビクツとしながら「そんなことあるわけないじゃん！」と甲高い早口で否定した。千秋にとっては「冗談」でも、鈴にとっては「トップシークレット」の事項。どんなことがあっても肯定する訳にはいかない。だが、事実は千秋の言うとおりだ。

鈴はF1のシートを見つける。そのフォルムの格好よさに吸い寄せられるように近づいていく。

「それにするの？　じゃあ私もやるっかな！」

鈴が選んだのはレーシングゲーム。

プレイスターズ3（第5部参照）でもしたことの無いジャンルでとても不安だが、それよりも自分の好奇心に勝てるものは無い。鈴と彼女の隣りのシートに座った千秋はほぼ同時に100円を投入。

ゲームスタート！

お金を投入すると、画面に使用車のセレクトメニューが出てきた。赤、青、黄色、白などなどバリエーションも多く、更に車種までリアル思考なので中々に凝った演出だ。千秋はそんな知識も特に無いので、青色の車を選んで鈴の選択終了を待っていた。

「うーん、どれにしようかなあ？　この赤いのも良いけど、白色も格好良いよね。黄緑のも気を銜った感じでアリだし、そういう考えだと黄色とかも良いなあ。でも何となく速そうなのは青……あ！　それじゃ千秋と被っちゃうなあ。どうしようかなあ！」

たくさんの色、車種を前に鈴も悩んでしまう。

だが、こういうゲームのセレクト画面で必ず付き物なのが……

「あ」

強制的に選ばれる、たまたまカーソルが合っていた赤色の車。

「……………」

カウントダウン制だ。

0秒まで粘った鈴は強制的に赤い車を選ばされる。

「どしたの？」

「……………いや、なんでもない」

鈴は勝手にバグだと思っていた。

コースは真ん中の中級者用のコースを選択。山道と高速道路の融合コースだ。起伏が激しい上にカーブもかなり多い。千秋はどうだか分からないが、鈴は全く持って初めてだ。何より今の今までハンドルを握ったこともなければアクセルを踏んだこともない。

画面に『Ready』と表示され、カウント代わりの信号が赤色から緑色に変わる。

静かに画面を見つめ、合図を待つ両者。

エンジン音が静かに響き渡る中、始まりを告げるチェッカーフラッグがサツと切られてレースが開幕した。同時に鈴の運転する車は左に急旋回して千秋やコンピューターの車まで巻き込む大事故を引き起こした。

「うわ!？」

「ちよつとちよつと! 鈴、アクセルとブレーキ、同時に踏んでない!？」

確かに鈴は両方踏んでいる。「何だか知らないけれど、あるんだつたら両方いつとけ!」ということだった。

「踏んでるねえ」

「アクセルは右だよ!」という千秋の忠告を聞き入れ、車を進行方向に向け直してリスタートを切る。もちろん手加減などしない千秋は、既に体勢を立て直し鈴の遙か前方で敵コンピューターとデッドヒートを繰り広げている。鈴は超絶最下位でスタートしたものの、調整されている敵コンピューターの最弱車には容易に追いつくこと

ができた。ストレートで追いつかれるなんて、欠陥車じゃないの？」
と思いながら横切る。鈴はコンピューターの強弱調整など意に介さない。隣で高レベルな勝負を繰り広げる千秋にと比べると、鈴は一人で高速道路をドライブしているようにさえ映る。しかも安全運転ではなく、少しカーブがキツくなる度に車体を大きく削りながら曲がり、時には車体ごと大きく跳ね上がるくらいのクラッシュも起こしていた。

結論を言ってしまうえば、鈴は運転が苦手だ。

「鈴、なんで鈴の車はそんなにボロボロなの？」

「……事故った」

結局一位を奪取した千秋は鈴の運転していた車の惨状に疑問を投げかけざるを得なかった。

「あれはもういいや……」と席を立ち、次なるゲームを探し始める。

「ああいうのは、初めて？」

「うん」

「それじゃ難しいよね」

慰めてくれる千秋。「そういう系が苦手なら、あんなのはどうかな？」と連れていったのはユーフォーキャッチャー。

「わあ、何か面白そうだね！」

「やったことある？」

「ある！」

ゲームセンターさえ今日初めて行ったのに、あるわけがない。完全に勢いで肯定した。

早速200円を投入して3回分の権利を購入する。

「せいっ！」

「ちよつとオオッ！」

同時にバシッと叩かれた？？ボタンに反応して、アームは何もないその場で上下運動をし、空を掴んだまま取入口まで移動する。

「……」

「……」

「千秋……」

「当然だよ！」

鈴は二回目の挑戦時に少し考える。恐らくこのボタンは移動方向を決定するためにあるものだろうと目測を立てる。ウィインという音と共にアームが横移動を開始。鈴の予測は確信に変わる。

「あの奥の大きい人形を狙う！」

「ええっ、無理だよ。手前の小さいのしといたら？ ああいうのは店側が獲らせる気にさせながら結局獲れないようにしてるのが多いんだよ？」

「ふふふ、千秋。やる前から負け戦発言？ らしくないなあ」

「いやあ、設定上不可能なだから、それとこれとは別問題——」
という真実な意見も聞く耳を持たず、ボタン入力を開始する。

「ほら、ほら！ 何か届きそうじゃない！」

「うーん、やっぱり厳しくない？ ギリギリで届かない感じがする……」

アームは人形のタグにほんの少しだけ引っかかり、少しだけ前のめりになる。その上に積んである大量の小さい人形の山が微妙に崩れる。

「ね？ イケそうじゃない？」

「確かに…… 案外イケるかも……！ 頑張つて！」

千秋の後押しを背中に受け、集中して最後のチャンスに挑む。

少し前のめりになっていいる大きな人形に向かってアームが接近する。そして最初に牙城を崩したタグのあたりにアームの爪の先が引っかかる。

「やった！」と歓声を上げる二人。でも到底持ち上がりそうにない。「頑張れえっ！」とエールを送るも持ち上がる気配もなくアームが外れてしまった。

「やっぱりだめかあ」と諦めかけたその時。

持ちこたえられなくなったその大きな人形が前に完全に倒れる。次の瞬間に上に積んであった小さい人形が大量に崩れてきた。その

勢いに乗じて2個も取入口になだれ込んできた。

「やった！ やった！ 千秋！ 獲れたよ！！」

嬉しそうに取り出し口からその小さい人形を取り出す。

「よかったじゃない！ 200円で2個取れちゃうなんてすごい！」
笑顔で「うん！」返事をする。レーシングゲームの時とは大違いだ。

「はい」

「え？」

千秋の手に人形が1個渡される。

「あげる！」

「え、いいの？」

「うん！ 半分だよ！」

「あ、ありがとう……」

女子の千秋でさえ一瞬だけ息を飲んでしまうその笑顔に、「モテるのも当然だなあ」と、ふとそんなことを思ってしまう。

「ゲームセンター？」（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

「Angel Code」も連載開始しました！
もし宜しければ「一読下さい！」

<http://ncode.syosetu.com/n7229x/>

Confiez-moi

シンと張り詰めた空気。響くのは時計がチクタクと時を刻む音と、鉛筆が机を叩く音。窓の外から蝉の声も聞こえるが、窓で8割ほどシャットアウトされている。生徒たちはそんな空気の中で必死に机に向かい、鉛筆を動かす。

その緊迫した空気を打ち破ったのは学校のチャイムだった。

鐘の音が鳴り響くと、生徒たちは一斉に顔を上げて「終わったー！」と各々が歓声を上げる。

「雪城、終わりだ。終・わ・り」

チャイムが鳴っても構わずテストを続行していた鈴の答えは先生により強制的に回収されてしまう。鈴は残念そうな表情で、先生の手によって回収されてしまったそれを見つめていた。

期末テスト、終了！

その次に彼らを待っているものといえば、学生たちのオアシス――夏休みだ。

時間割はテスト用に変更されていたので、生徒たちは昼の12時に解放される。うだるような炎天下の道中でも、夏休みに突入した彼らのハイテンションの前では全く効力をなさない。昨日までとは大違いだ。

「やっつと！ やっつとと終わったな！」

イツキも柄にも無く喜びを隠し切れないようだ。テストが終わった喜びと夏休みに突入する喜びはどんな学生にとっても至高の瞬間ということだ。

「うん……」

「どうした？ 明日からは、っーか今日からは！ 夏休みなんだぞ

！？ そんなにテンション低くってどうするんだよ？」

鈴は浮かない表情。どうやら先ほどのテストを引き摺っているようだ。

「だって！ テストの時間が足りなくって最後の問題が解けなかったんだもん！」

「そいつは運がなかったな。最後の問題ってなんだっけ？」

「『1811年に国後島に上陸したロシア人は誰か』ってやつ」

「ああ、あつたな」

「せっかく分かったのに！ チェブラーシ——」

「違う！！ 違うよ！ てか前も似たような問題で書いてただろ！

鈴は『ロシアソレ』の図式が定着しすぎてるって！」

ちなみに正解は「ヴァーシリー・ゴローウニン」である。

自宅に行き着いたイツキと鈴。

室内も相変わらずサウナ状態だ。風が通らない分、外気温よりも暑く感じる。二人はその熱気に押されながらも入室するが、同時に居間の辺りでハイテンション虚しく力尽きて倒れ込んでしまう。

「……暑い……」

「……暑いな……」

「私、溶けちゃうよ……あ、でも体重減るかも……それならちょっとくらい溶けちゃってもいいかな……」

「シャワーでも浴びてくるか？」

「いい。どうせ上がったらまた汗かくんだし一緒だよ」

「それもそうだな……」

ガラス戸に遮断された蝉の声が頭にこだまする。

鈴は何かを思い出したかのように「そうだ！」と言いながら、サツと立ち上がる。

「どした？」

「プール！ イツキ、プールに行こう！」

イツキはその提案に、「なるほど、名案だ」と素直に思った。昼日中の暑い室内を避けつつ、自分たちはプールの涼しい場所で過ごせる。夕方に帰宅すれば涼しい午後の風で室内を冷やせるし、何よりプールに行けば鈴の水着姿が拝めるではないか。イツキは一言もなくその提案に快諾する。

だが、それ安直というものではないか。

暑いのなら涼しいところを選べばいい。それは合理的であり、非常に賢明な判断だと言えるだろう。頭が痛くなるほどに暑いのであれば、誰だって回避したい。毎年夏になるとニュースで「暑さでダウンしそうな白熊くんに氷がプレゼントされました」などというどうでもいい報道がされるくらいだ。動物園で飼育されているとはいえども仮にも厳しい野生環境に生きる彼らだ。自然に対する適応能力は、科学で支配されすっかり弱くなってしまった人間たちよりも遙かに上なはず。そんな彼らでもダウンしてしまうこの夏の暑さ。弱体化してしまった人間共が敵うはずもないのだ。だからこそ人間たちは回避を求める。イツキと鈴もそんな彼らの内のひとり。つまりは同じ事を考えている、ということだ。二人が考えていることと同じ事を考える人もたくさんいるはずだ。誰だって同じ事を思わず。だからこの結果は当然なのだ。考えが甘かった。

彼らはプールの施設入場口の前で佇み、サツと背を向けて帰路につく。

「……皆考えることは一緒だってことだな」

「そーだね。もう私たち溶けるしかないね……」

「絶対に中也混んでるよな、あれ」

「そりゃそうだよ。人と人の間に少し水面が見える程度だよ。もし入場できたとしても絶対に泳げないね」

鈴は具沢山の味噌汁を思い浮かべる。

水着の入ったカバンを持ちながら帰る二人。先程よりもずっと暑

く感じるのは彼らの気のせいだろうか。「そりやそくだよなあ」とため息をつくイツキが、「ドーン!」という声と共に背後から何者かに体当たりされる。

「Ca fait longtemps! 浮かない顔して、どうしたんだ?」

白色のワンピースに色白の肌と碧眼、風に揺れるブロンドの綺麗な髪。

偶然通りがかったリオだった。

「ふえ? なんて?」

「『Ca fait longtemps』は『久しぶり!』っていう意味」

「久しぶりじゃないよ?」

お決まりの会話のやり取り。

芸能界における、朝昼晩関係なく「お早うございます」と挨拶をするテンプレートに似ているような気もするが、会う度に「久しぶり」と挨拶(?)するのはリオくらいだろう。

「リオ……お前なあ、こんなクソ暑い時に……」

体当たりされて前方に押し出されたイツキは体勢を崩しながら文句を言う。

「見つけたら飛びかかるのは普通じゃない?」

「普通なの?」

「普通じゃねえよ!」

何故か肯定気味の鈴にすかさず一般常識を押し込める。この言葉を信じてしまったら、鈴は知人を見つける度に飛びついてくるエキサイトガールになってしまう。

「そんなことよりも、二人つきりでお出かけしているイツキと鈴の方が気になるカモ? 何々、二人は付き合ってるノ?」

リオはニヤニヤしながら覗き込むように尋ねる。しかしリオの言うとおりだ。事情を知らない人から見ればそのような誤解も生まれてしまうだろう。

「ち、ちがッ——」

「どおなんだろね」

鈴はイツキの否定に重ねて曖昧な返答をする。イツキは驚いた。即刻で否定されると思ったからだ。だが、鈴の答えはあくまで否定ではないというだけであって、肯定でもないということは決して忘れてはならない。だがそれでもイツキの心は一瞬で晴れやかになる。「これは、もしかしたら脈アリというやつでは？」とかピンク色の妄想だっけしてしまう。健全な男子高校生の性だ。

「ほオ？ 意味深だね」

リオは相変わらずのイタズラっぽい笑顔ではにかんでいる。際どい所もズバツと訊いてくる彼女だが、何故か全く憎めない。これも可愛さと愛嬌のなせる技だろう。

「ま、深い意味はないよ」と会話を切る鈴。鈴もこれ以上この話をするとは色々とマズいことになるかもしれないということを悟ったのだろうか。鈴の期待通りに、リオも「そっか！」と笑って流す。続けて「イツキ、残念だったなア！ でもほら、鈴がダメでも私はフリーだよ？」等と潤んだ瞳と可愛げ満載の仕草声色でせまってくるのでイツキも相当に慌ててしまったが、ハツと気付くともう話題は別の方向に進んでいた。イツキは肩透かしを食らったのだ。いつもリオはこのような感じなのに、毎度毎度一杯食わされてしまう。「学習云々よりも容貌を武器にするのは反則だ……！ 不可避だ……！」とイツキは悔しさを噛み締める。

「で、二人でどこに行こうとしてたノ？」

この間に鈴は右肩に提げていた力バンを見せて、「これ」と答えた。

「水着？ プール？」

「そう。でもむちゃくちゃ混んでてさ。入るのを諦めて帰ろうとしてたんだ」

「ああ、プールは時期的に難しいよネ。しかも男と二人でなんて、襲われちゃうかもしれないヨ！ 男は皆ルーなんだヨ！」

「ルー？」

「ふうん、男は皆ルウなんだ」

「鈴、たぶん鈴が考えているのとは違うと思う」

イツキの予想通り、鈴の頭の上にはターバンを巻いたインド人がカレーを差し伸べてくる画が浮かんでいた。

「ルーはオオカミ。だから、男は皆オオカミ！　つまりイツキも源も、友一もオオカミ！　ってマメール（母）が言ってる！」

イツキは「友一はどちらかというとバンビだよなあ」と自己修正しておく。

「だから、鈴一人じゃ危険なので私もプールに参加したいのであつた！　いいかな？」

突然の申し出。彼らは断る理由など全くない。むしろイツキにとつては予想だになかった幸運だ。男一人が可愛い子を二人も独り占めして、「あいつ、あんな可愛い子を二人も……！」「畜生！　羨ましいぜ！」などという男達の嫉妬と羨望の眼差し一点に集めながらプールデート（イツキが勝手にそう思っている）できるなんて優越感に浸りまくられるではないか。実際はそうではないのだが。

「べ、別にいいけど——」

しかし残念なことに、その自慢する場であるプールは先程断念したばかり。イツキの期待は空気の抜けたボールのように萎れてしまふ。

「——プールはもう満員で入れないんだよなあ……」

鈴も残念そうに頷く。

「ふうん、そうだよネ。でもま、要は泳げればいいんだよネ？」

「そうだけど、もうこの辺りにプールなんてないだろう？」

「それに、あつたとしてもきつと満員だよお」

恐らく、いや100パーセント彼らの予想は当たっている。いくら生徒会役員であつてもこんなことまで解決はできないだろうと思つていたのだが、リオは「よし、分かつた」と答えた。そして、一言。

「Confiez-moi！」

意味は、「私に任せなさい！」。

Confiez-moi (後書き)

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

「Angel Code」も連載開始しました！
もし宜しければ「一読下さい！」

<http://ncode.syosetu.com/n7229x/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0603x/>

だから彼女はついてくる！

2011年10月21日02時59分発行